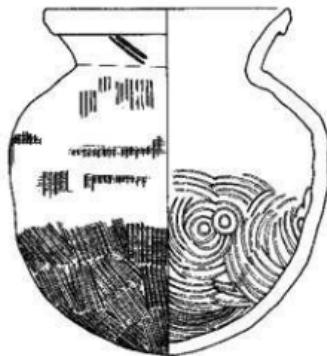


四條畷市埋蔵文化財包藏地調査概報7

# 清滝古墳群発掘調査概要

——四條畷市大字清滝——



1980・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報7

# 清滝古墳群発掘調査概要

——四條畷市大字清滝——



1980・3

四條畷市教育委員会

## はしがき

この報告書は、1級河川清瀧川の分水路改修工事に先立って、昭和53年度に大阪府教育委員会が行われた試掘調査に引続いて、昭和54年度に四條畷市教育委員会が実施いたしました当該地域の、全面発掘調査の概要であります。

四條畷市清瀧に所在している正法寺跡につきましては、古瓦等の出土から白鳳時代に創建された古代寺院であることが知られていました。昭和44年の冬に、枚方・富田林・泉佐野線の打上バイパスの延長予定地がこの寺域にあたるため、大阪府教育委員会の手によって予定地内の事前調査が行われました。その結果、奈良時代前期から室町時代に至る間の遺物の出土があり、また寺院の遺構の概要も推定されるに至りました。その後、昭和51年度には四條畷市教育委員会の手により、寺跡の範囲確認調査を実施いたしましたので、更に寺跡の概要を明らかにすることができたのであります。

今回清瀧川分水路改修工事に関しましては、調査地域が正法寺遺構の東端部分であること、更にこの附近には双子塚と呼ばれる地名があり、この塚から出土した石棺が現存していることから、清瀧地域の古墳群の存在を予想しつゝ慎重な調査を実施いたしました。結果は予想通り、正法寺遺構の東端部分に古墳2基、合口型棺墓の発見となりました。またこの地点から縄文後晩期の土器片、石器等の出土もあり、調査の目的を果すことができましたことは大きな幸がありました。

この調査に関しましては、大阪府枚方土木事務所、大阪府教育委員会をはじめ数多くの方々のご指導、ご協力をいたしました。ここに深く感謝の意を表します。

四條畷市教育委員会

教育長 櫻井 敬夫

## 例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が、昭和53年度～昭和54年度に1級河川清瀧川分水路改修工事に先立ち、大阪府枚方土木事務所より委託を受けて実施した四條畷市大字清瀧402他に所在する清瀧古墳群発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、昭和54年2月19日に着手し、昭和54年3月31日に昭和53年度調査事業を、又、昭和54年8月22日に着手し、昭和55年3月31日に昭和54年度調査事業をそれぞれ終了した。
3. 発掘調査は、教育委員会社会教育課技師・野島 稔を担当者とし、調査補助員として永井英司があつた。
- 出土遺物の整理・実測などについては、野島 稔、永井英司、相松 透、永井春子、阪本富美子、川本三智子、木本倫江、井手恵子、溝上キヨカ、鴨川羊子、井上智子、山口文代、武田美智代、山口真澄、藤野三水流、樋口博子、松岡俊江、畠中みゆき、植田真紀があつた。
4. 本書の執筆は、野島 稔が行なった。
5. 発掘調査の進行・報告書作成などについては、大阪経済法科大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・野上丈助、堀江門也、財団法人枚方市文化財研究調査会・宇治山和生、三宅俊隆、桑原武志、東大阪市教育委員会・下村晴文の各氏から種々のご教示をうけた。なお調査の実施にあたっては、小倉昇三氏には終始懇切なご協力をうけることができた。記して厚く感謝の意を表したい。
6. 発掘調査の進行については、大阪府枚方土木事務所太間工区・調査作業については、株式会社フジタ工業、桑原組、奥野重機の全面的な協力を得た。

# 本文目次

## 例　　言

I 調査に至る経過 .....	1
II 遺跡の位置と歴史的環境 .....	3
III 調査概要報告	
層序 .....	6
第1号墳 .....	7
第2号墳 .....	8
第2号墳土壤 .....	9
大溝 .....	9
第1号合口甕棺墓 .....	10
落ち込み状造構 .....	11
板枠井戸 .....	13
IV 出土遺物 .....	15
V まとめ .....	25
VI 観察表 .....	27

## 大　　目　　次

- 第 1 図 調査地位置図
- 第 2 図 清滝古墳群周辺地形遺跡分布図
- 第 3 図 清滝古墳群遺構配図
- 第 4 図 清滝古墳群第 1 号墳平面実測図
- 第 5 図 清滝古墳群第 2 号墳平面実測図
- 第 6 図 大溝平面実測図
- 第 7 図 清滝古墳群第 1 号合口甕棺墓実測図
- 第 8 図 落ち込み状遺構平面実測図
- 第 9 図 板枊井戸
- 第 10 図 出土土器実測図 I
- 第 11 図 出土土器実測図 II
- 第 12 図 出土土器実測図 III
- 第 13 図 出土石器実測図
- 第 14 図 繩文式土器拓影
- 第 15 図 円筒埴輪拓影
- 第 16 図 正法寺字切図

# 図版目次

- 図版 1 遺跡周辺の航空写真
- 図版 2 清滻古墳群航空写真
- 図版 3 清滲古墳群第1号墳航空写真
- 図版 4 清滲古墳群第2号墳・大溝航空写真
- 図版 5 清滲古墳群航空写真
- 図版 6 清滲古墳群調査地全景
- 図版 7 清滲古墳群遺景
- 図版 8 清滲古墳群近景
- 図版 9 正法寺跡・忍ヶ岡古墳近景
- 図版 10 清滲古墳群第2号墳・大溝
- 図版 11 清滲古墳群第1号墳・第2号墳全景
- 図版 12 清滲古墳群第2号墳
- 図版 13 合口壺棺蓋
- 図版 14 板棺井戸
- 図版 15 清滲古墳群第2号墳
- 図版 16 清滲古墳群第2号墳周溝底土器出土状況
- 図版 17 清滲古墳群第1号墳・第2号墳周溝底土器出土状況
- 図版 18 清滲古墳群第2号墳周溝内土器・石製品出土状況
- 図版 19 遺物写真・土器Ⅰ
- 図版 20 遺物写真・土器Ⅱ
- 図版 21 遺物写真・土器Ⅲ
- 図版 22 遺物写真・土器Ⅳ
- 図版 23 遺物写真・土器Ⅴ
- 図版 24 遺物写真・土器Ⅵ
- 図版 25 遺物写真・土器・石製品Ⅰ
- 図版 26 遺物写真・石器Ⅰ
- 図版 27 遺物写真・石器Ⅱ
- 図版 28 遺物写真・石器Ⅲ
- 図版 29 遺物写真・石器Ⅳ
- 図版 30 遺物写真・石器Ⅴ
- 図版 31 遺物写真・接合資料
- 図版 32 遺物写真・埴輪
- 図版 33 遺物写真・鉄器・馬の歯
- 図版 34 双子塚出土石棺蓋・身

# 清滝古墳群発掘調査概要

## I 調査に至る経過

清滝古墳群は、四條畠市大字清滝402番地他に所在する。この古墳群のある清滝丘陵には、現在約2町四方の水田地に正法寺の字名が残り、白鳳時代の薬師寺式の伽藍配置と推定される大寺院によって古墳群を削平して建立している。

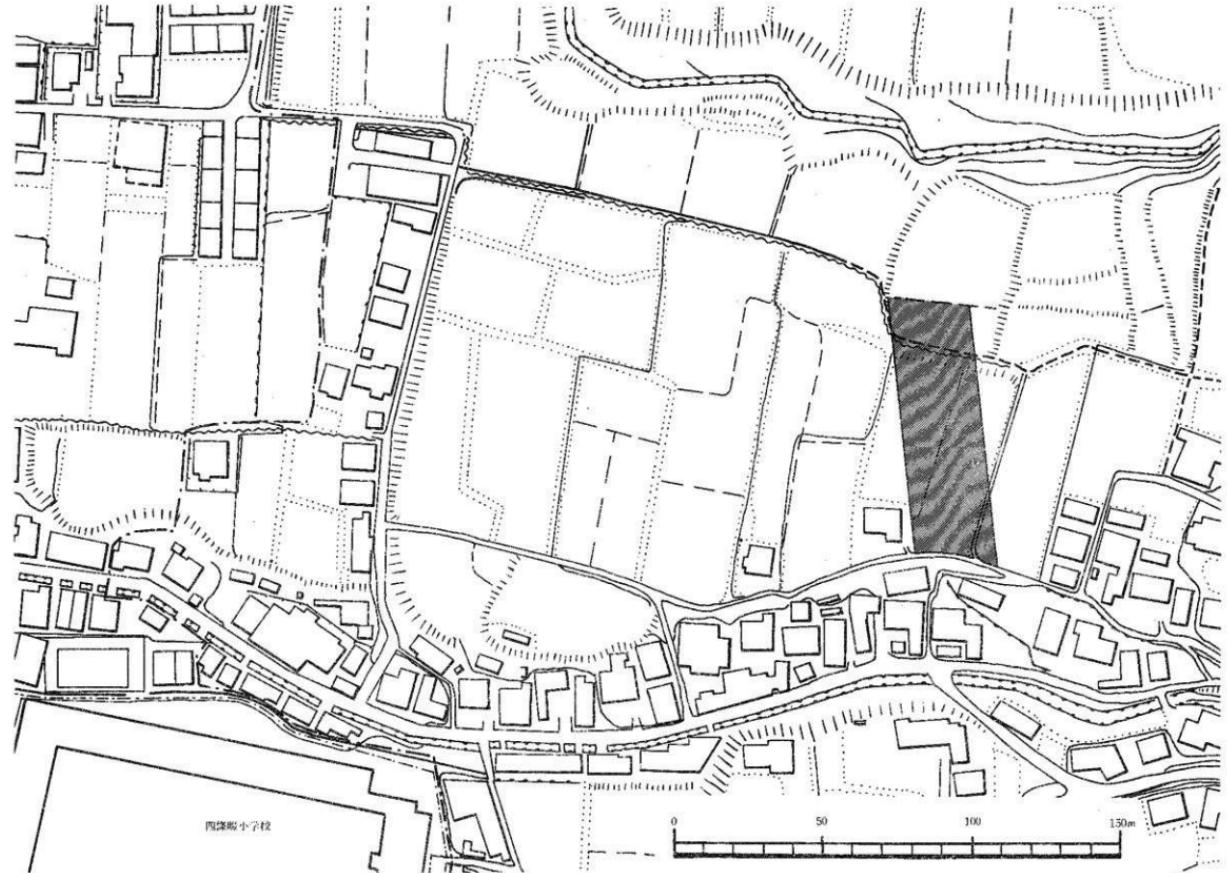
正法寺跡については、古くから古瓦等の発見で寺跡の存在が周知されていた。近年、この附近も宅地開発の波がおしよせ刻一刻変貌していった。しかしこれまで当寺院の発掘調査が行なわれていなかったためにまだまだ不明な点が多くたが、昭和44年以降3回の発掘調査が実施され、大きな成果をあげている。昭和44年12月に大阪府教育委員会が府道枚方・富田林・泉佐野線が枚方市打上一国道163号線に至る新設バイパス予定地内の事前発掘調査を行なった。その結果、石積基壇、東西にのびる土堀・大溝・井戸などの遺構が検出され、各遺構内から奈良時代前期～室町時代にかけての瓦や土器の出土が報告されている。これらの遺構・遺物から正法寺跡の伽藍配置図が推定で示されている。

昭和51年度には、四條畠市教育委員会が国庫補助金事業として寺域範囲確認調査を実施した。その結果、東西約108m(360尺)・南北約145m(483尺)の範囲に広がる奈良時代前期の寺院跡であることが確認された。確認された遺構としては、幅3mの西側築地跡遺構が検出し、奈良時代前期～平安時代に至る龐大な軒丸瓦・軒平瓦・平瓦などが発見され、又、中門推定跡では断面観察によって基壇の一部を検出し、礎石及び瓦類の出土があった。金堂推定跡については、上面において鎌倉時代の石組井戸1基を検出した。この調査によって正法寺跡の中心伽藍と推定されているところについては比較的保存状態が良好であることが明らかであった。

四條畠市地籍図に小字正法寺と記録されている東端の場所においても遺物の散布がみられ、この土地について昭和52年度国庫補助金事業の交付をうけて四條畠市教育委員会が実施することになった。

調査地は、大字清滝402番地で表上下約2mで地山に達した。遺物包含層から平瓦・須恵器・土師器片が多量に出土した。この清滝402番地までが正法寺跡であったことが明らかである。

北側の大字清滝362-2番地の水田が小字「双子塚」として地元では呼ばれており、以前古墳時代後期の家形石棺がここから発見されたとい伝えられている。今なお双子塚発見の



第2図 調査地位置図

石棺蓋は正法寺跡東方の国中神社入口に、又、石棺の身は中野の現・正法寺境内にそれぞれ分離して置かれている。

今回の調査については、昭和53年に清滝川分水路改修工事予定地区間の試掘調査を大阪府教育委員会文化財保護課主査堀江門也氏によって実施された。調査の結果、大字清滝362-2番地の水田において溝状遺構が検出され、遺構内から数多くの土器が出土したことによって、本格調査を実施することに至った。

調査については、大阪府枚方土木事務所・大阪府教育委員会・四條畷市教育委員会の三者の協議により、四條畷市教育委員会が本格調査を実施することになった。

## II 遺跡の位置と歴史的環境

清滝古墳群は大阪府四條畷市大字清滝に所在する。四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県との県境になる。南北に通じる東高野街道と東西に横切る清滝街道の交叉地であり、陸路交通の要地となし、中世には清滝、逢阪千軒と呼ばれる中世村落として栄えていた。このような地理的に重要な位置を占めていたことは、原始・古代においても同様、文化的先進地域の様相を呈し、多くの遺跡の存在が知られている。

当古墳群は生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の海拔30~35mの丘陵地形を利用して立地している。東の生駒山系から流れる水は諏良川・清滝川・権現川となり、いずれも丘陵を横切りつつ東西に谷地形を形成している。

今回の調査地はこの清滝川の右岸から発見されている。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、この枚方台地は大きく北から枚方市船橋川・穂谷川・交野市天野川・寝屋川市寝屋川・四條畷市諏良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地には原始・古代の幾多の遺跡の存在が知られている。

最近になって旧石器時代遺跡の発掘調査が行なわれるようにになった。枚方台地の旧石器時代遺跡としては、國府期のナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している枚方市楠葉東遺跡、ナイフ形石器・小型舟底形石器・石核が出土した津田三ツ池遺跡、細石器・石核が出土した藤阪宮山遺跡、国府型ナイフ形石器・石核が出土した交野山神宮寺遺跡、ナイフ形石器・細石器・削器・彫器・磨器等を出土した諏良川遺跡、有舌尖頭器を出土した南山下遺跡が知られ、他に表面採集された寝屋川市打上、四條畷市忍ヶ岡古墳附近においてもナイフ形石器が採集されており、旧石器文化研究上枚方台地はきわめて重要な位置をしめている。

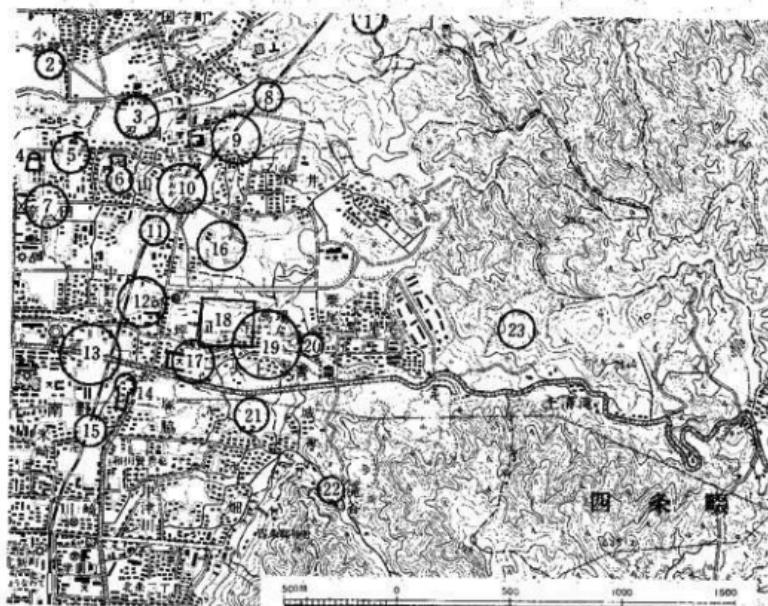
縄文時代には米粒状文・山形文を施した押型文土器を特徴とする土器が出土する交野市神宮寺遺跡、四條畷市田原遺跡において近畿地方で最古の土器が出土している。又、枚方市穂谷遺跡、大東市寺川堂山にも早期の土器が発見されている。

前期には石器のみ採集された津田三ツ池遺跡が知られる。

中期には過巻文や半截竹管文をもつ船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡、交野市星田旭遺跡があり、後期・晩期にはほぼ完形の高杯形土器・深鉢形土器・注口土器・土製勾玉・土偶等多量の土器・石器が出土する四條畷市諏良岡山遺跡、清滝古墳群においても石鏡・深鉢形土器が出土する。

弥生時代については四條畷市田原遺跡において前期末の壺が出土し、北河内において最初の弥生時代の遺跡と考えられている。

中期初頭の畿内第Ⅱ様式の時期に出現する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡や、中期の畿



第2図 清滝古墳群周辺地形遺跡分布図

- |               |             |               |
|---------------|-------------|---------------|
| 1. 打上遺跡       | 9. 坪井遺跡     | 17. 四條駅小学校内遺跡 |
| 2. 小路遺跡       | 10. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 18. 正法寺跡      |
| 3. 褒良川遺跡・褒良寺跡 | 11. 南山下遺跡   | 19. 清滝古墳群     |
| 4. 四條駅市銅鐸出土地  | 12. 奈良井遺跡   | 20. 國中遺跡      |
| 5. 北山遺跡       | 13. 中野遺跡    | 21. 木間遺跡      |
| 6. 忍ヶ岡古墳      | 14. 墓の堂古墳   | 22. 龍尾寺跡      |
| 7. 奈良田遺跡      | 15. 南野遺跡    | 23. 千豊敷遺跡     |
| 8. 国守遺跡       | 16. 岡山南遺跡   |               |

内第Ⅲ～第Ⅳ様式には磨製石剣・磨製石鎌・炭化米や直径11.5mの巨大な竪穴式住居跡をもつ田ノ山遺跡が著名である。後期の畿内第Ⅴ様式になると枚方市・寝屋川市・交野市の淀川左岸丘陵上には数多く点在する。代表的なものとしては、長尾西遺跡・銅鏡や分銅形土製品が見つかった高地性集落の鷹塚山遺跡、六角形の竪穴式住居跡が発見された山之上天堂遺跡、鹿の絵の線刻した土器が出土した藤田山遺跡、北河内ではじめて方形周溝墓

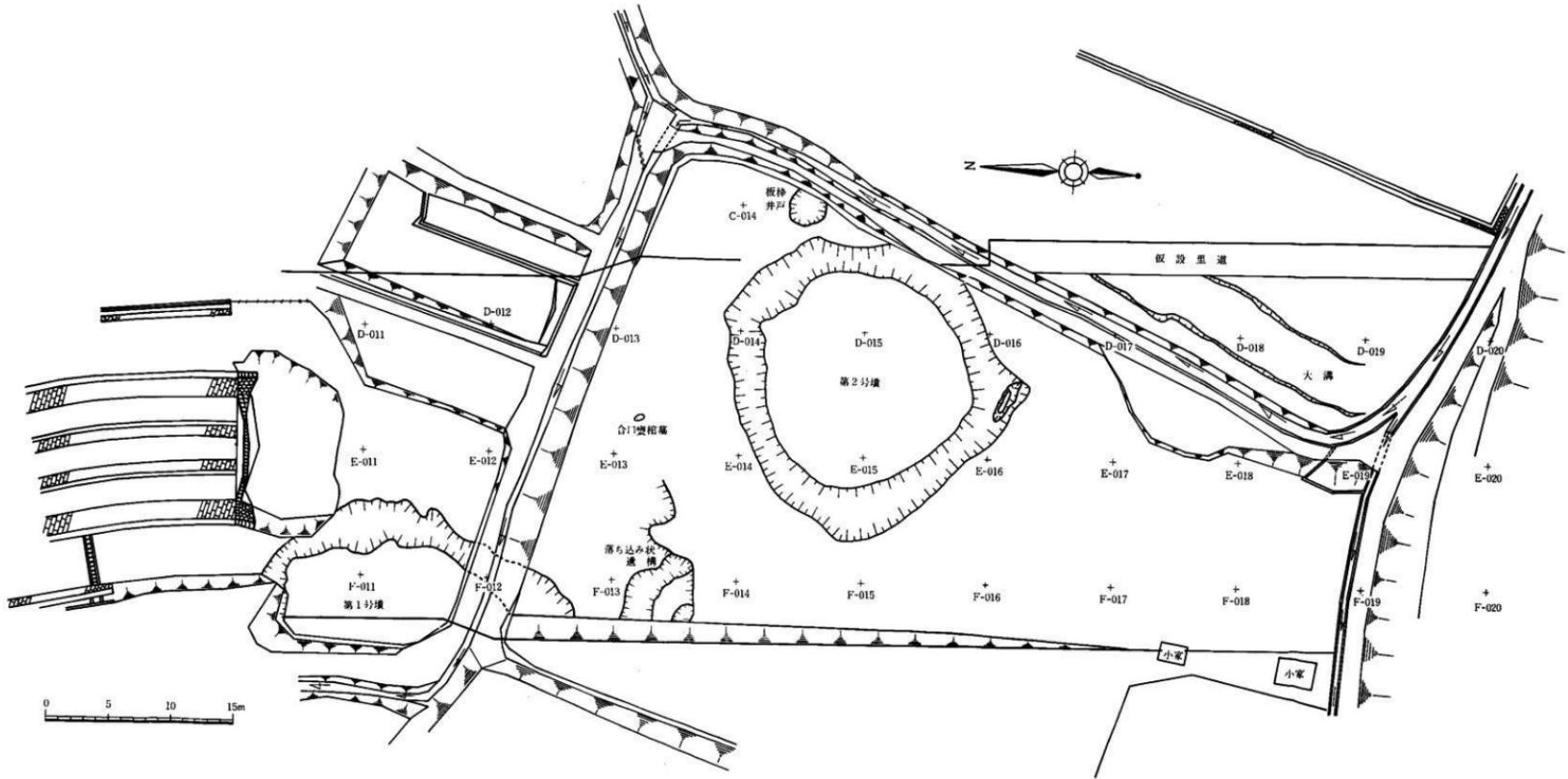
が検出された茄子作遺跡、数多くの竪穴式住居跡及び方形周溝墓をもち、住居と墓地をV字溝において分離した星ヶ丘西遺跡、一棟の竪穴式住居跡から鉄鎌を含む53個の鉄器片が出土した星ヶ丘遺跡がそれぞれ発見され、弥生時代文化研究上きわめて重要な場所である。

古墳について見ると8面の銅鏡を出土した万年山古墳、直径25mの円墳と考えられ銅鏡1面・銅鏡6本・鏡形石製品2個を出土した藤田山古墳、粘土構内から硬玉製勾玉、ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄劍・鉄刀子を出土した交野市妙見山古墳、全長約80mの前方後円墳で後円墳に長さ約6.3m・幅約1mの竪穴式石室を今なお見ることのできる忍ヶ岡古墳がある。前期末から中期にかけて交野市車塚古墳、枚方市禁野車塚古墳、中期には牧野車塚古墳、四條畷市墓の堂古墳がそれぞれ確認されている。後期になると生駒山系西麓に数多く分布する。大東市寺川古墳群・堂山古墳群・四條畷市清滝古墳群・交野市寺古墳群・倉治古墳群・枚方市白雉塚・比丘尼塚・寝屋川市寝屋古墳があり終末期には寝屋川市石室古墳がよく知られている。

古墳時代の集落跡としては、枚方台地には四條畷市が大半を占めている。

四條畷市岡山南遺跡の大溝内から切妻造りの家形埴輪に五個の堅魚木をつけたものや、円筒埴輪・動物埴輪とともに最古の木製下駄が出土している。中野遺跡においては5世紀後半の製塙土器や、最古型式の須恵器、勾玉、臼玉、紡錘車が出土し、隣接地の奈良井遺跡には、石敷製壇炉及び直径約40mの方形周溝状の祭祀場が検出し、周溝内から多量の土器とともに手捏ね土器、人形土製品、動物土製品、滑石製臼玉がそれぞれ一括で出土している。又同一層内から小型の蒙古野馬が四体分を埋葬されていた。

古代から中世にかけての歴史時代になると数多くの遺跡が知られている。



第3図 清滝古墳群構造配置図

### III 調査概要報告

今回の調査地点は、四條畷市大字清滝402番地他で、四條畷市字切図に「正法寺」と呼び名が残る東端が対象地であった。

調査は、昭和54年2月19日から始めた。発掘調査ヶ所が決まっている為、予定の分水路敷中央部に3ヶ所のトレーニングを設定して造構の保存状態及び基本的な層序の確認を行った。

区画設定は、水路敷幅（東・西）32mの中心をEラインとして10m区画で東側からDライン・Eライン・Fラインと横軸を命名し、南北・縦軸は北端から10m毎に算用数字の011・012・013……020をあてて区画を設定した。それ故1区画は100m<sup>2</sup>の面積を有する。

#### 層序

調査地西端のFラインの基本的層序は、上から第Ⅰ層（耕土）、第Ⅱ層（床土）、第Ⅲ層（褐色砂質土）、第Ⅳ層（茶褐色砂質土）、第Ⅴ層（黒褐色砂質土）、第Ⅵ層（淡褐色砂質土）となる。各層は南から北へ、東から西へと傾斜し、特に造構のベース面（第Ⅵ層直上）においては、南側F-018ポイントと北側F-013ポイントで約1.3mの比高差が認められた。

第Ⅰ層 耕土。

第Ⅱ層 床土。ほぼ南北水平に床土が置かれている。

第Ⅲ層 厚さ約10cmで南から北へかなりの傾斜をもつていて。染め付けの磁器類、陶器類などが出土している。

第Ⅳ層 厚さ約20~40cmで全域に認められる。瓦器碗・土師質小皿・土釜・擂鉢・練鉢・須恵器・平瓦等が出土しており、鎌倉時代末~室町時代の包含層を削りとるよう堆積している。

第Ⅴ層 厚さ約20~40cmで全域に認められる。南から北へいくに従って徐々に薄くなつておらず、流れ込みによる堆積と考えられる。出土遺物としては、須恵器・土師器・平瓦（白鳳時代布目瓦）等が出土している。平安時代の須恵器が大半を占めている。

第Ⅵ層 厚さ約10~50cmで全域に認められる。造構のベース面を構成している。ベース面は第Ⅲ層・第Ⅳ層・第Ⅴ層の堆積状態と同じく南から北へ傾斜をもち、特にこの第Ⅵ層においては、南側F-018ポイントと北側F-013ポイントで約50cmの比高差が認められた。この層内から平瓦及び須恵器が出土し奈良時代の遺物包含層と考えられる。

F-016ポイントの地山直上において生駒山系産の花崗岩集石が認められた。

この花崗岩集石内から平瓦及び須恵器が出土した。この集石は清滝古墳群第2号墳の墳丘部にあった葺石であると考えられる。

### 第1号墳（第4図、図版11）

調査区F-011に第1号墳が検出されている。昭和53年に清瀧川分水路改修工事予定地区間の試掘調査を大阪府教育委員会文化財保護課主査堀江門也技師によって実施され、溝状遺構を検出されたと報告されているのがこの第1号墳周溝であることが確認された。

第1号墳を検出した大字清瀧362-2番地の水田は、大字清瀧402番地の畠地とは1段低く約2.5mの比高差である。

第1号墳西側は調査範囲外のため不明であるが、全体としてはほぼ円形を呈し、径は25~26mと考えられる。マウンド上部はすでに削平されており埋葬施設を確認することはできなかった。残存高は約0.3mを測る。

特にマウンド近くは、平安時代に擾乱を受けたことが周溝上層より黒色土器、土師器等の出土遺物から明らかである。

周溝の肩部は標高T・P・36.45m、幅2~4m、深さ0.2~0.6mを測った。

周溝も上部が削平を受けて浅くなっているが、南周溝（G-014、清瀧402番地）は、ほぼ完全な形で検出された。南周溝内の堆積土層は、上層から淡褐色砂質土層、青灰色砂質土層の順に堆積している。

青灰色砂質土層内から須恵器壺、甕の器種だけが多量に出土した。これらの土器はすべて粉碎して投棄された状態であった。

東周溝の堆積土層は青灰色砂質土層が堆積し、すでに上層の淡褐色砂質土層は削平されている。周溝内からの出土遺物としては、杯身・眞・器台脚部がそれぞれ出土している。

須恵器甕（第11図-47）は口径44.0cm、残存高24.4cm、基部径32.8cmを計る。口頭部は外湾気味に外傾し、外上方にのび端部で外下方に屈曲する器形をなし、口頭部に2条の凹線と11線部下に2条の凸線を有する。3段に各1条の波状文を施されている。

眞（第10図-30）は口縁部が欠損して不明であるが推定口径13.0cm、残存高17.0cm、基部径3.5cm、体部最大径9.1cmを計る。

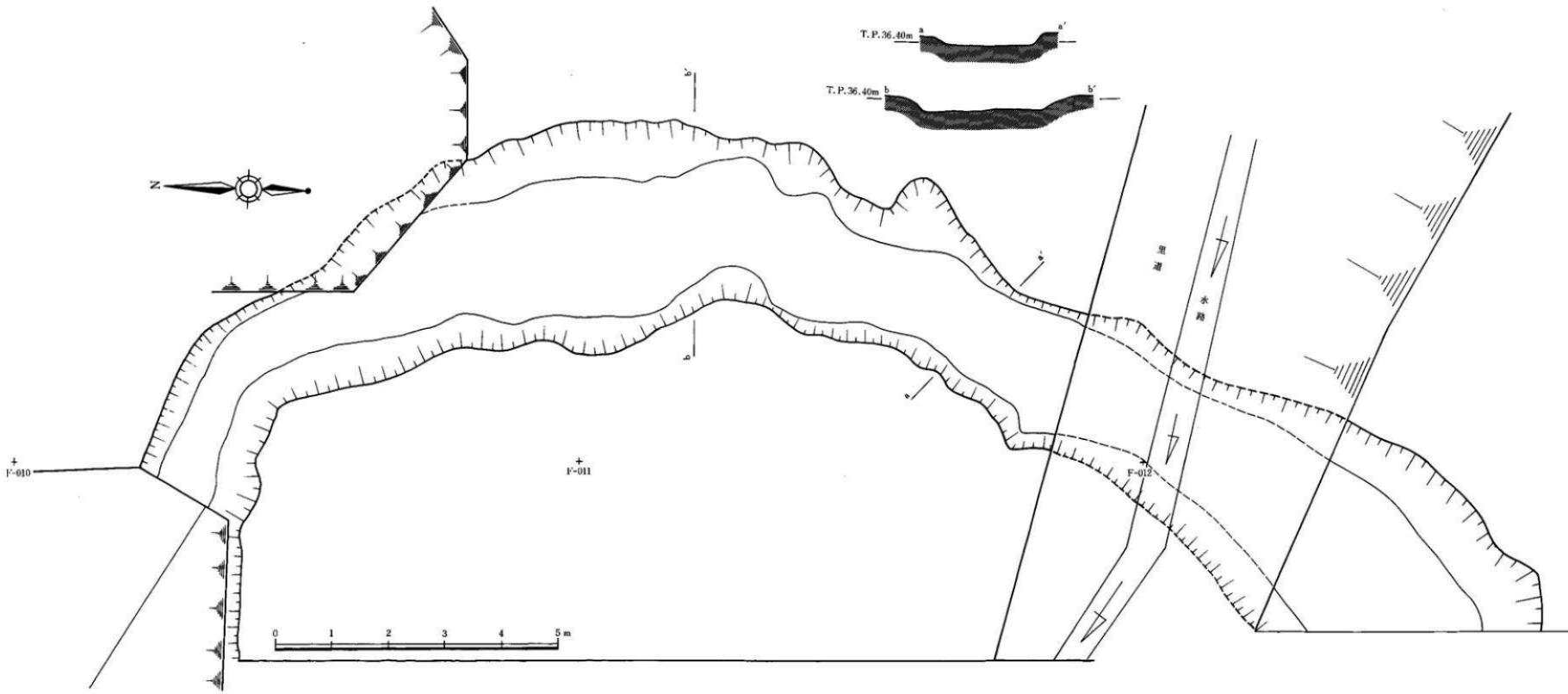
基部の細くしまった頸部で胴部は肩がはり、器体は尖がり気味の丸底で体部に2.0×1.6cmの円孔が穿っている。

器台脚部（第12図-56）は残存高42.0cm、脚底径27.4cmを計る。

脚部は細い筒部を呈し脚部に2条づつの凹線を6帯付け、6区に分けたその間に三角透しをおこなっており、6区内にそれぞれ波状文を施している。

第1号墳の1部が字「双子塚」と地元では呼ばれており、いい伝えではこの双子塚から古墳時代後期の家形石棺（図版34）が出土した事が知られている。

石棺身は中野正法寺境内に、棺蓋は国中神社参道入口にそれぞれ分離して置かれている。棺身は凝灰岩を削いたもので、その後の加工は加えられておらずよく保存されている。棺蓋の部分は、棺身と同じく凝灰岩で上部は後に加工され板碑となったもので、線彫りの仏



第4図 清滝古墳群第1号墳平面実測図

像が描かれている。裏側は家形石棺の様子がよくうかがえる。

大きさ等の検討からみて正法寺の棺身と園中神社の棺蓋は1組の家形石棺である。

この家形石棺が第1号墳丘削平時に検出されたものと推察する。

### 第2号墳（第5図、図版12）

水路敷中央部のD・Eライン-015ポイントにおいて第2号墳を検出した。

第2号墳は東西23.40m、南北23.50mの円墳である。古墳の墳丘は0.35mしか残存せず、盛土の上部は第1号墳と同様に削平されており、墳丘部埋葬施設を確認することはできなかった。

現存する周溝肩部は標高T・P・38.70m、幅2.3~4.3m、深さ0.2~0.3mを測る。

古墳の築造は、清滝丘陵を構成している黄褐色花崗岩風化土層を一部形成した上に、2層にわけて盛土を行なう。表土及び底土をのぞくと褐色砂質土が約0.3m、その下に淡褐色砂質土が約0.2m積まれている。

F-015地点の第2号墳検出ベースにおいて、花崗岩石敷が東西1.4m間隔に3ヶ所、南北に1.6m間隔に4ヶ所検出された。3間×4間の掘立柱建物跡の根石の石敷遺構と考えられ、花崗岩石敷内から平瓦片及び須恵器蓋杯(蓋)第10図-6、図版19-6が出土している。この瓦及び土器の形式からみて奈良時代、正法寺創建時における掘立柱建物と考えられ、この時期に第2号墳を削平している。

出土遺物としては、蓋杯(蓋)第10図-3、図版19-3は東周溝肩部から出土している。この資料以外すべてが周溝内からの出土である。

南周溝内から土壤1基が検出されている。この土壤については後に述べるが、土壤上層から多量の須恵器、土師器が出土している。

周溝内の完形土器出土状況からみて、土器投げがグループ的な出土状況である。まず初めに東周溝内においては器台・装飾壺・北周溝内には壺・長頸壺・甕・高杯・鉄製刀子、西周溝内には蓋杯・短頸壺・碧石製切子玉・円筒埴輪・馬の歯、南周溝内には壺・蓋杯・滑石製紡錘車がそれぞれ出土している。

西周溝内からの馬の歯は一地点からの出土であり、歯の検出本数からみて馬1頭分にある。歯の出土する場所が他の周溝に比べ約0.2mの窪みである。馬の頭骨部の埋葬時に土壤状に掘り込んでいたと思われる。

この清滝丘陵上には数多くの馬の頭骨及び歯が出土している。中野遺跡においては、古墳時代中期(5世紀後半)の馬の下顎骨や馬の歯が出土し、又中野遺跡と清滝古墳群の間に位置する奈良井遺跡においては、1辺約40mの方形にめぐらす祭祀場から古墳時代後期(6世紀初頭)の完全な馬の骨1頭分及び頭骨だけを土壤に埋葬している例を含めて、この祭祀場から合計5頭分の馬の骨及び歯が検出されている。

## 第2号墳土壙（第5図、図版15-1）

E-017地区第2号墳周溝内に土壙1基を検出した。

2号墳土壙は東西4.3m、南北1.2m、深さ0.6mのU字状を呈し、主軸をN-62°-Wに土壙をつくっている。

土壙東北隅肩部から蓋杯(身)第10図-24、土壙底から蓋杯(蓋)第10図-1、第10図-2、蓋杯(身)第10図-21及び高杯10図-34がそれぞれ出土したもので第2号墳の供獻土器と考える。

第10図-24の蓋杯(身)は、内弯気味に立ち上り内傾する凹面を成す。受部は上外方にのび端部は丸い。

第10図-1の蓋杯(蓋)は、口縁部がほぼ垂直に下り端部は内傾する。天井部は高く丸い。第10図-2の蓋杯(蓋)は、口縁部が外下方に下り端部は内傾する段を成す。天井部は高く丸い。

第10図-34の高杯は、杯底部よりゆるやかに外上方へひらき、杯部は底部と口縁部の境は明瞭ではなく磨耗がひどい。脚部は脚柱部からゆるやかに裾部に至る。

## 大溝（第6図、図版10）

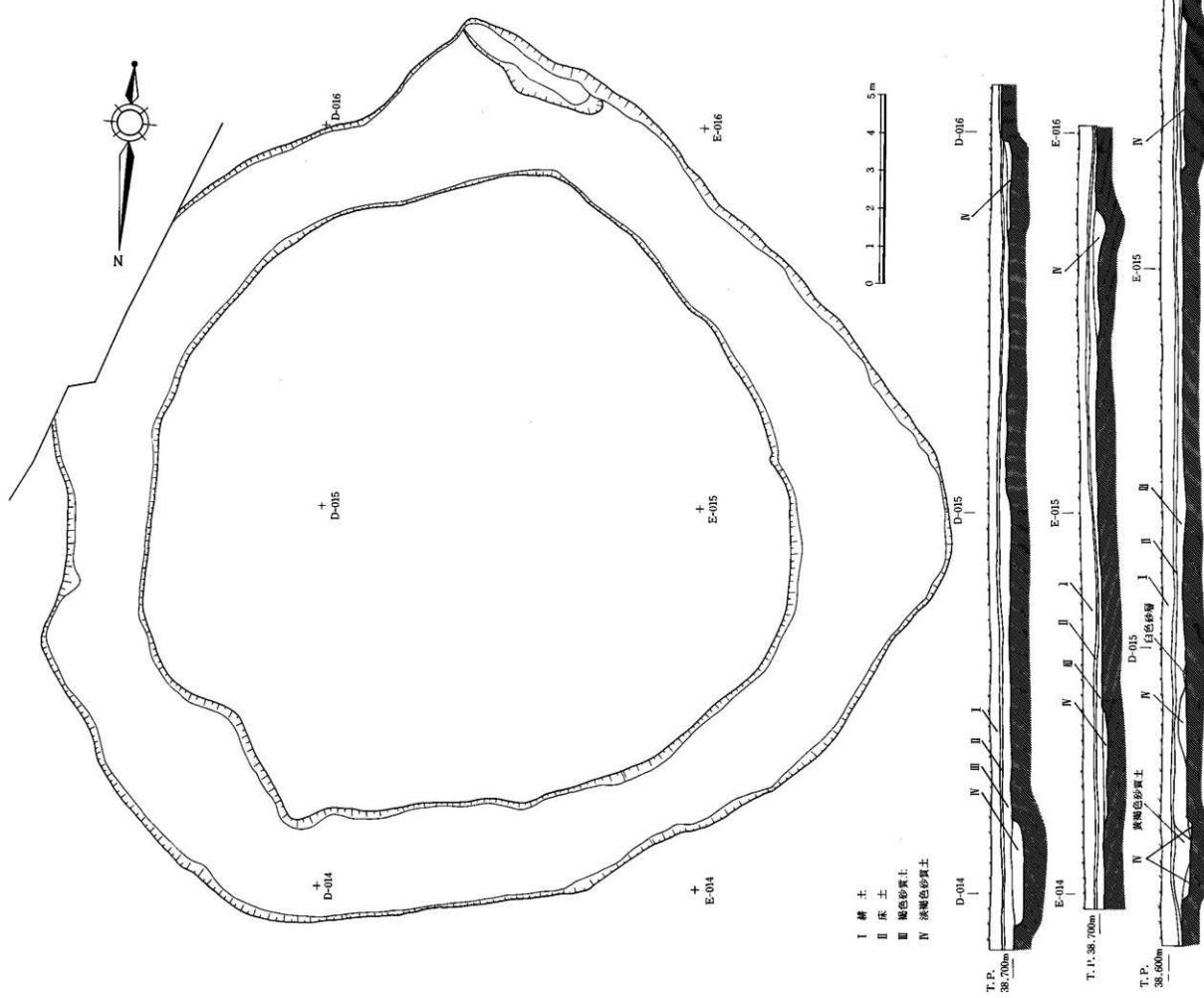
調査区南東部分、D-018の南北方向に大溝遺構が検出されている。

調査区内での規模は延長24m、幅北部の上段で5m、下段で4.5mを測る。断面は幅広いU字形を呈していたと考えられる。

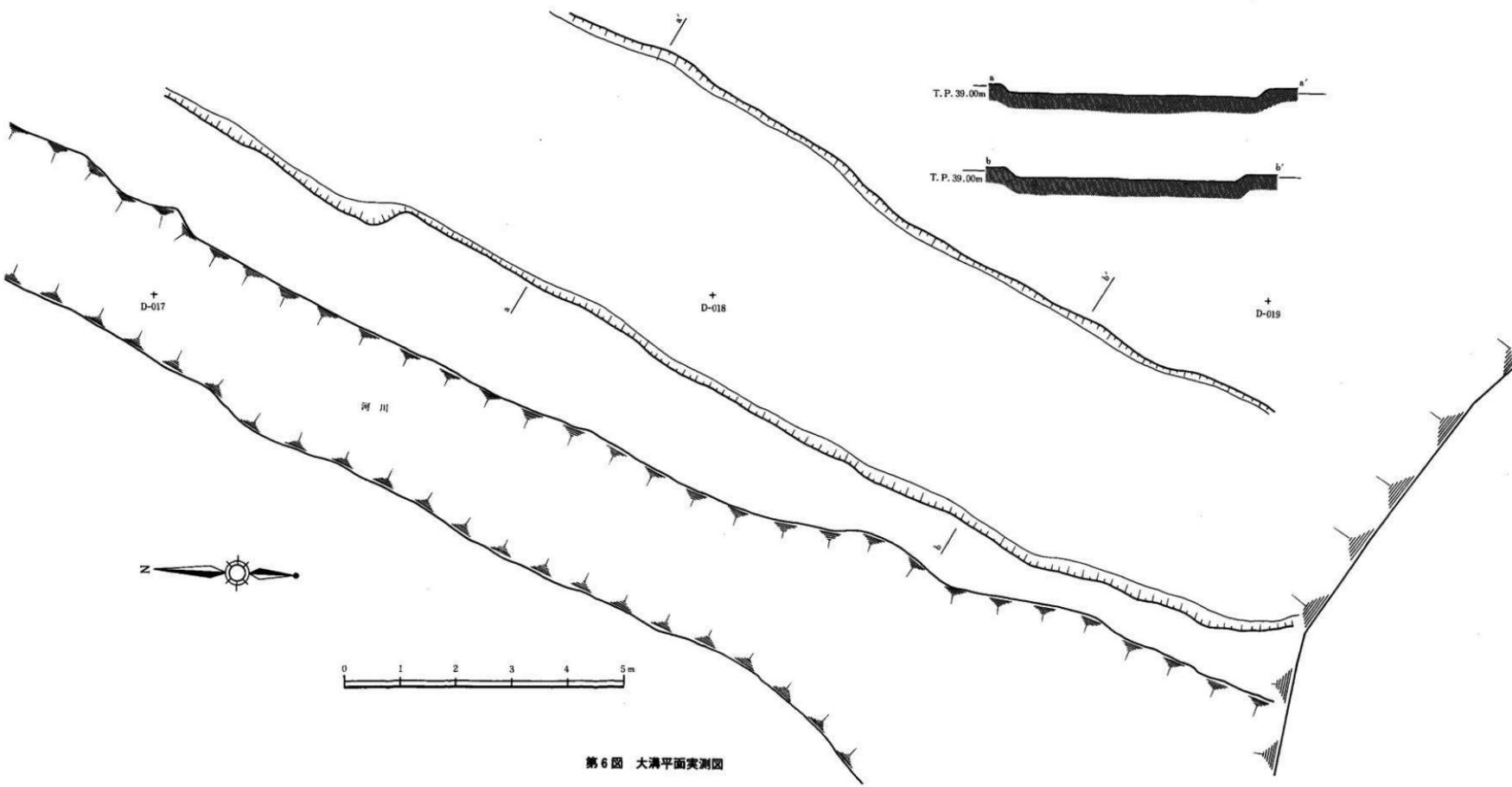
遺構肩部の標高は、T-P・39.10mで深さ20cmを測る。又、南部の上段は4.2m、下段で3.8mで全体に南から北に少しではあるが傾斜している。底面での南端と北端との比高差は約10cmを測る。覆土は褐色砂質土であり、出土遺物は土師器及び須恵器の細破片が多く、うち須恵器杯身(第10図-22)の口径11.2cm、器高4.4cm、受部径15.2cmを計る。たちあがりは、内傾した立ち上りで端部はやや鋭く受部は上外方にのびる。底部はやや浅く半らである。細破片及び杯身の土器から考えて、この大溝は6世紀中葉の遺構と考えられる。

この大溝遺構の上面層位は、第1層耕土、第2層床土ですぐに遺構面に達している。水田の小字名は馬場であり、東方の国中神社関係の馬場であろう。大溝検出面上層内から中・近世の陶磁器片が少量ではあるが出土しており、大溝遺構がこの馬場と呼ばれる中・近世において削平されたと考えられる。

この清滝丘陵のレベルは一定でなく、正法寺跡を見てもわかるように東へ行くにつれてレベルも高くなっているが、清滝字正法寺の第2号墳検出の畠地と清滝字馬場の大溝検出の水田との比高差はあまりなく、やはり字馬場の方も約1m程度、以前に削平したことから見てもわかる。



第5图 清海古墓群第2号堆平面及剖面图

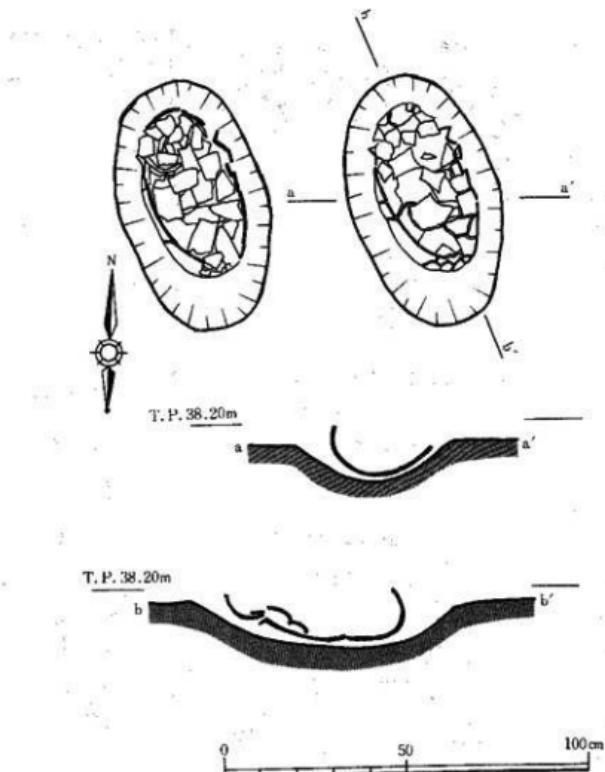


第6図 大溝平面実測図

第1号合口斐棺墓（第7図、図版13）

第2号墳の北側 E-014 に存在する合口の斐棺墓で黄褐色砂質土より掘り込まれた長さ 68cm、幅40cm、深さ20cmの梢円形、舟底状土壤内に土師器の斐形土器をほとんど横位の状態で出土した。口を北に向け長軸の方位は、N-27°-Wで土器棺の傾角は12°37'を計る。蓋には口径14.0cm、胴部径17.0cm、器高17.9cmの小形丸底斐を用い、土器棺には口径20.8cm、胴部最大径24.6cm、器高37.0cmの完全な形の長胴形斐形土器を用いている。この斐棺は、大きさからして乳嬰児の埋葬に使用されたと考えられる。

棺内には流入土と思われる細かく軟かい暗黃灰色土が流満していた。なお、この棺内に伴う遺物は全く認められなかった。又、斐棺上に盛土等の施設の存在も確認できなかった。



第7図 清滝古墳群第1号合口斐棺墓実測図

### 落ち込み状遺構（第8図）

調査区F-014に落ち込み状遺構が検出されている。規模は長さ7.0m、幅a-a' 1.5m、b-b' 2.2m、深さ0.4mを測る。底は平底に近く、全体に東から西に少しではあるが傾斜しており、底面での東端と西端との比高差は0.3mを測る。

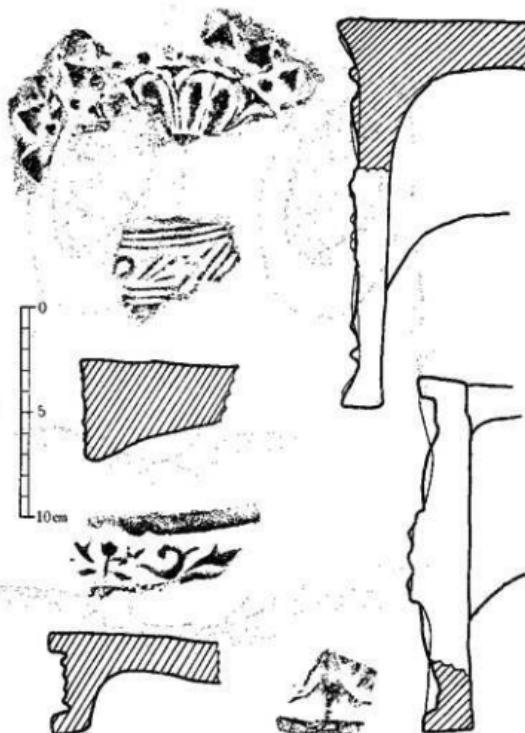
遺構内の堆積土は褐色砂質土で、第11図-41の壺・第11図-42の黒色土器及び軒丸瓦・軒平瓦がそれぞれ出土している。

壺は口径14.6cm、胴径20.4cm、残存高6.5cmを計る。口縁部は「く」の字に外折して端部でつまみ上げて厚する。いわゆるS字口縁をもつ形態で胴部は扁球形を呈するものと考えられる。次に口径22.0cm、器高5.7cmの内黒の黒色土器で、内面に暗文が施されている。その他の遺物として

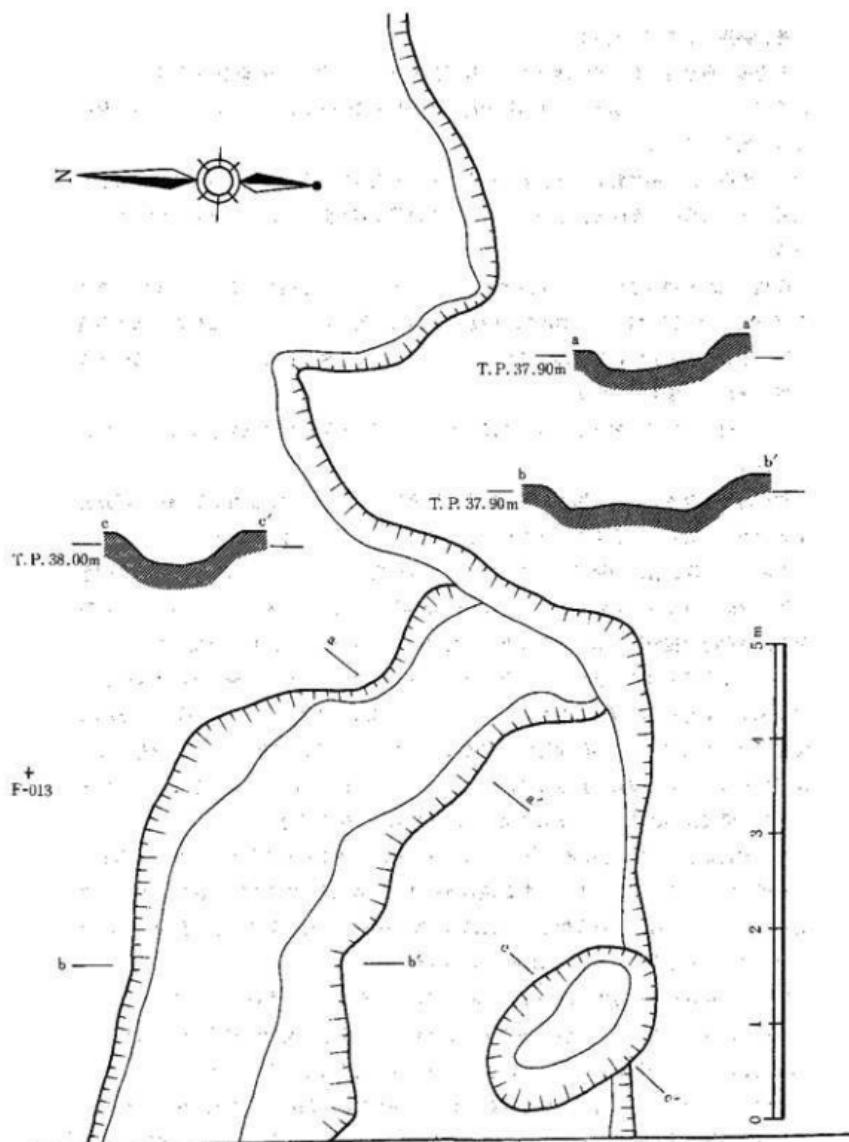
は、土師器楕・須恵器壺・壺が出土している。

軒丸瓦については、正法寺第1類の創建寺の単弁8葉軒丸瓦と第2類aの複弁8葉軒丸瓦及び第2類aの均正唐草文軒平瓦及び第7類唐草文軒平瓦がそれぞれ出土している。

落ち込み状遺構南側に検出した長辺2.2m、短辺1.3m、深さ0.35mの土壤状遺構が検出されたが、堆積土は落ち込み状遺構と同一の褐色砂質土であるが出土遺物は発見されていない。



出土瓦拓影



第8図 落ち込み状平面実測図

### 板枠井戸（第9図、図版14）

調査地中央東部分C-015地区の小倉昇三氏所有残地に木組方形横桟形井戸をもつ井戸が検出されている。黄褐色砂質土の地山層のT・P・38.56mの上に立地するため、井戸は深く掘られている。

井戸の規模は、南北約2.7m、東西約2.4mの隅丸方形の平面を呈する。井戸の深さは、高所にあるため約3.5mと深く井戸底に入頭大の花崗岩2個が置かれた状態で検出されている。

横桟は二段が残っているが、下段は一辺が約1.4mに対し上段約1.6mで上下で大きさが異なる。井側は長さ1.2m・幅0.2mの板を、一辺に8枚が残っていた。縦板の上部は腐蝕が進んでおり、長さ約1.5~1.6mはあったと考えられる。縦板材はヒノキ材を、横桟はスギ材をそれぞれ使用している。

井戸の掘り方は二段掘りであり、上段において木組方形横桟形井戸を下段においては素掘であった。

井戸内は、全体にわたり黒灰褐色粘質土が堆積している。中央には径2.5~3cm、現長約1mの先端を尖らした節をぬいた竹がさし込まれていた。又、井戸検出面において、土師質上器、陶器片、箸、曲物底板、漆器椀が置かれた状態で検出している。これは井戸廃棄の際に呪病を行なった痕跡で、このような例は四條畷市忍ヶ丘駅前遺跡において、昭和51年の国鉄片町線複線化工事に伴う調査の石組井戸について本市2例目の発見である。

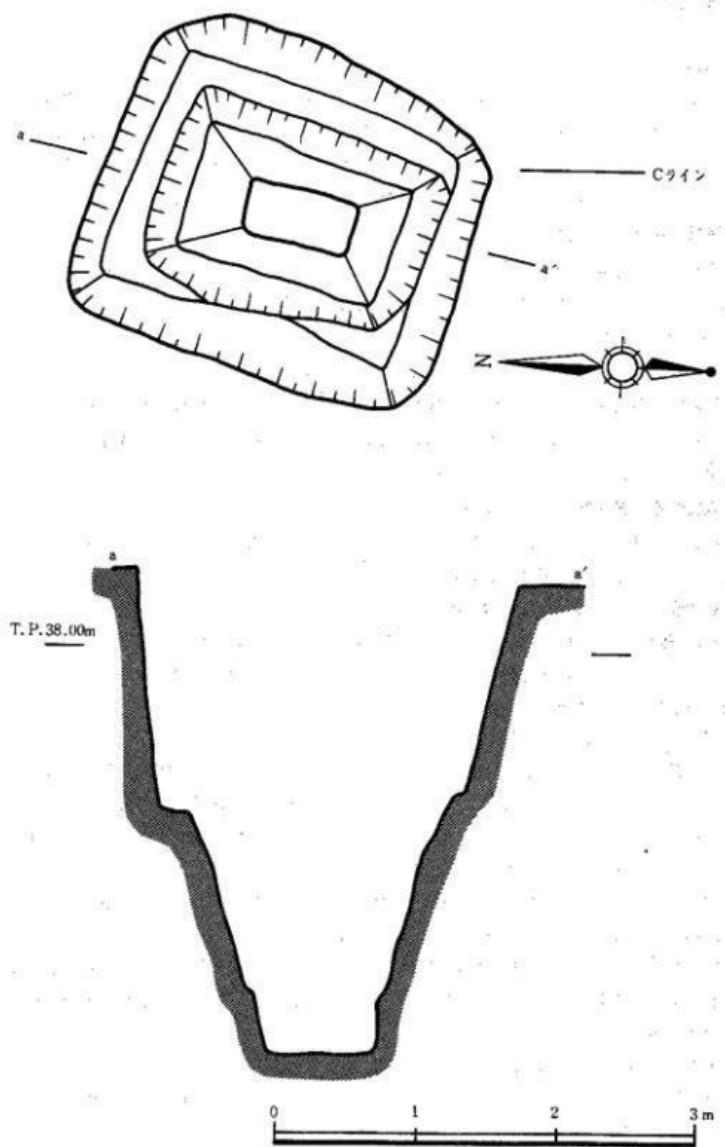
出土した土器・木製品としては、土師質焼で口径50.0cm、器高12.0cm、頸部1.2cm、口縁高1.5cmを計る。口縁部は内湾しながら立ち上り端部は平面を成す。口縁部下1.5cmに断面三角形の頸部があり端部は鋭い。口縁部内、外面には丁寧な回転横ナデ整形を行ない、体部外面はヘラ削り調整を施されている。胎土は密で0.1~0.5cmの白色砂粒及び小石を多く含む、焼成は良好であり、体部外面から口縁端部まで煤が付着している。

次に木製品としては、漆器椀がある。口径11.0cm、器高4.0cmで全体をロクロで削出し、やや粗い作りであり、ロクロ削りの棱線、漆の重塗り痕が多く見られる。内・外面黒漆地に朱漆塗りを行なっている。曲物底板は、径12.9cm、厚さ0.45cmで柾目材を円形に削出し、断面わずかに台形を呈する。中央に0.2cmの円孔を穿つ。

箸は、径0.5cm、長さ28.1cmで片側を削っており、少しカーブを持っている。

これらの置かれた土器、木製品からみて井戸廃棄の時期を室町時代前半~中頃にかけての時期であり、井戸築造をそれより以前すなわち鎌倉時代後半とみることができる。

正法寺跡内からも石組井戸が発見されており、時期的には鎌倉時代中頃~後半にかけてである。寺跡出土の劍頭文軒平瓦の出土及び土器からみて、この井戸の廃棄と同時に清流正法寺が文献に見られるように一度廃絶したのがこの時期である。



第9図 板枠井戸実測図

## IV 出土遺物

### 概観

2基の円墳・大溝・落ち込み状遺構・板枠井戸遺構に伴って出土した遺物は、土器・石製品・埴輪・鉄器・木製品・石器からなる。土器は、古墳時代後期の土器の他、奈良時代～室町時代の土器類が出土していた。大半の土器は第2号墳周溝内に投げられた状況であることから、遺物は比較的短期間のうちに堆積したとして考えられる。

#### 蓋杯（第10図1～24）（図版19～20）

蓋杯の蓋(1)。(3)口縁部は垂直に下り端部は内傾する段を成し、棱は断面三角形で端部は鋭く天井部が高い。(2)口縁部は外下方に下り端部は内傾する段をもち天井部が高い。(4)。(5)(7)～(11)口縁部は下外方に下り端部は丸い。天井部はやや高く平らである。

(6)口縁端部は丸や、かえりは内傾する。中央部に擬宝珠つまみが付く。

杯身(12～24)蓋部の口径と同様に大形化しており、たちあがりは比較的低く内傾気味に立ち上がっており、その端部は内傾する明瞭な段をなしている。受部内面に沈線を認められる例についてはオリコミ手法によるものであるといえよう。

#### 装飾付壺（装飾部）（第10図26～27）（図版21）

口頭部は外反して上外方にのびる28と口縁部はやや内傾後上方にのびる27が出土し、底部はやや深く接合部の剣離痕が認められる。

#### 短頸壺（第10図28、第12図49～50）（図版21、図版25）

28、49頸部の短く肩の張る底部丸底の短頸壺である。50口頭部より内傾して立ち上り、更に外反してのびたのち端部付近で外方へ屈曲するもので、成形はマキアゲ、ミズビキ手法で体部の調整には回転ナギ調整が施されている。

#### 壺（第10図29～31）（図版21～22）

29、30体部の小型化で最大径はほぼ $\pm$ 前後に求め、球形をなす。口頭部は基部が細くラッパ状に外反し、頭端部で段をなして外反する。頭部外面及び体部に刺突文が施されている。31頸基部が太く外反する長い口頭部を有する。体部は球体をなし、その最大径は体部高の $\pm$ 前後に求められる。体部及び頸部に文様は施されていない。

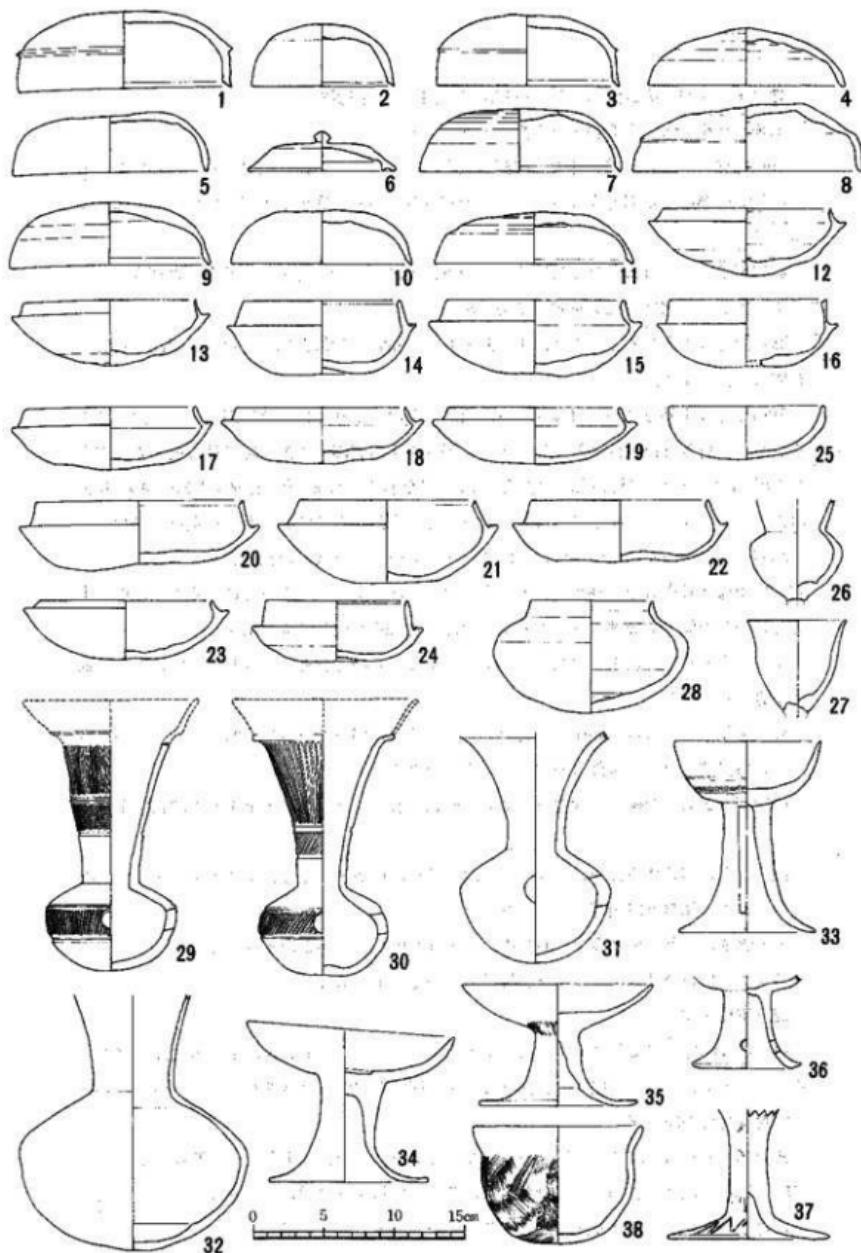
須恵器編年では30はⅡ型式第2段階に、29、31はⅡ型式第3段階とみられる。

#### 長頸壺（第10図32、第12図52）（図版22、図版24）

32頸基部が太く外反する長い口頭部を有する。肩部は口頭部と約115°に開くものと、52頸基部よりほぼ垂直にのびる口頭部があり、肩部は口頭部と約130°に開くものとがあり、最大径は体部中位に有す。

#### 高杯（第10図33、第10図36）（図版22）

33小型無蓋高杯で浅い杯部は外反する口縁部を有し、1条の凸線下に1条4本の波状を施す。36浅い杯部。脚柱部からゆるやかに裾部に至る。



第10図 出土土器実測図 I

### 甕 (第11図41, 第11図44~47, 第12図51)(図版23, 図版24)

器形の大小から、大形甕・小形甕に大別できる。

④①口縁部が「く」の字に外折し端部で上方へつまみあげた様に肥厚する。いわゆる「S字口縁」の形態で基部外面はヘラでナデ調整されている。底部が欠損しているが扁球形を呈する。

④②口頭部は上外方にのび端部近くでやや下外方に短く下がり、更に上外方にのび内傾して端部に至る。肩部は約115°を成して張り出す。

④③口頭部は外寄して立ち上り、口縁部下外方へ屈曲して端部は丸くおわる。肩部は約120°を成して張り出す。

④④口頭部は上外方にのび口縁部で少し屈曲したのち上外方にのび端部でやや内傾して丸くおわる。肩部は口頭部と約95°を成して張り出す。肩部と体部の境で最大径を成し内寄しながら下方に下がる。外面肩部~体部にかき目整形(7条/1cm)後平行タタキ調整(4条/1cm)のあとスリケシナデを施している。外面体部~底部にかけては、かき目整形後平行タタキ調整を施している。内面体部には円弧文・同心円タタキ調整が施される。

④⑤口頭部は外寄気味に外傾し、外上方にのび端部近くでやや下外方に短く下り、更に上外方にのび内傾して端部は丸くおわる。肩部は約85°を成して張り出す。

頭部外面の先・後に1条の凸線、端部下方に2条の凸線を有す。各凸線の間にはヘラ描文が施されている。

④⑥口頭部は外寄気味に外傾し、外上方にのびその端部で外下方に屈曲し、さらに外上方にのび口縁部に至る。端部は内傾しながらのび丸くおわる。

口頭部に2条の凹線と口縁部下に2条の凸線を有し、その間に1条1本の波状文を施している。

以上、甕の形態特徴について述べた。次に手法の特徴としては、マキアゲ、ミズビキ成形、回転ナデ調整で口頭部ハリツケを行なう。

大型甕及び一部の小型甕の内面に円弧文・同心円タタキ調整が施されている。

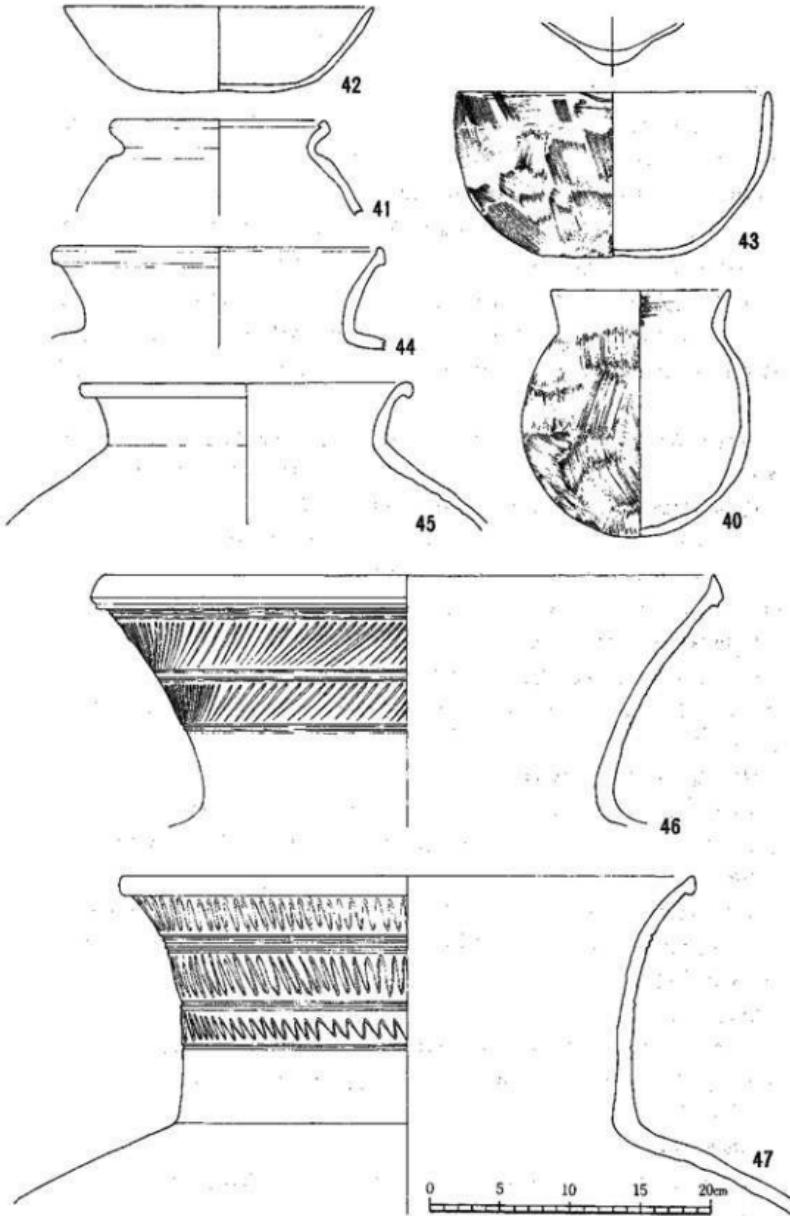
各胎土は精良な粘土を使用され、焼成は良好で堅緻である。

### 椀 (第12図48)

口縁部は内寄して端部は丸く、底部は平底を呈している。最大径は上位の肩部に位置する。マキアゲ、ミズビキ成形で、体部は内・外側とも回転ナデ調整を行なっている。

### 器台 (第12図55~56)

55台部は丸く口縁部でやや折り曲げて厚くしている。上方に1条(21~25本)下に1条(15~19本)の波状文を施す。56脚部には、2条の凹線を6帯付け、6区に分けてその間に三角透しを行なう。6区内に1条~3条の波状文をそれぞれ施す。



第11図 出土土器実測図 II

### 椀（第10図25）（図版21）

口径10.8cm、器高3.7cmで全体に浅く口縁部はやや内弯氣味。端部は丸くおさまる。内、外面ともにナデ調整が施される。茶褐色を呈し、胎土は細かい。

### 高杯（第10図34～35、第10図37）（図版22～23）

椀状の浅い杯部をもつ高杯である。杯部の形態には底部と口縁部が見分けられる。底部から直線的、あるいは内弯氣味にのびる杯部と脚柱部からゆるやかに広く聞く據部の脚台にのせたもので、杯部と脚部の接合は挿入法によって行ない、接合部外面にはみ出した粘土はヘラで搔き取っている。調整は杯部内面はナデ調整、外面は回転ナデ調整を施される。脚部挿入後は刷毛目を施している。脚柱部外面は縱方向の刷毛目の上をヘラ磨き、据部外面をナデ調整、内面をヘラ削りをそれぞれ行なっている。

37は脚柱部だけの出土であるが、先に述べた34、35の内・外面調整については同一調整を施している。しかし脚柱部はほとんど開かずに、据部で屈曲して聞く形態である。

### 甕（第10図38、第11図40；第12図53～54）（図版13、図版23）

いずれも頸部から「く」の字状に外反する口縁をもつが、38は肩のはらない胴部でゆるやかな丸味をもって重下して平底に近い。40、53は最大径を中位にもち球形丸底を呈する。54は長胴形の甕で丸底で全体に縱方向の刷毛目が施されている。53、54は合口甕館。

### 片口大鉢（第11図43）（図版23）

口径21.8cm、器高11.6cmの大形の片口をもつ鉢である。口縁部は内弯氣味に立ち上がり端部は丸くおわる。底部は平底で最大径22.6cmは上位に位置する。内面はナデ調整、外面は刷毛目をそれぞれ施される。

### 黒色土器（第11図42）（図版23）

平らな底部から口縁部にかけてゆるやかに外傾し據部に至る。口縁部は丁寧な横ナデ、底部に指圧痕をスリケしているが一部に指紋が残る。外面口縁付近に炭素がみられる。

### 刀子（図版33）

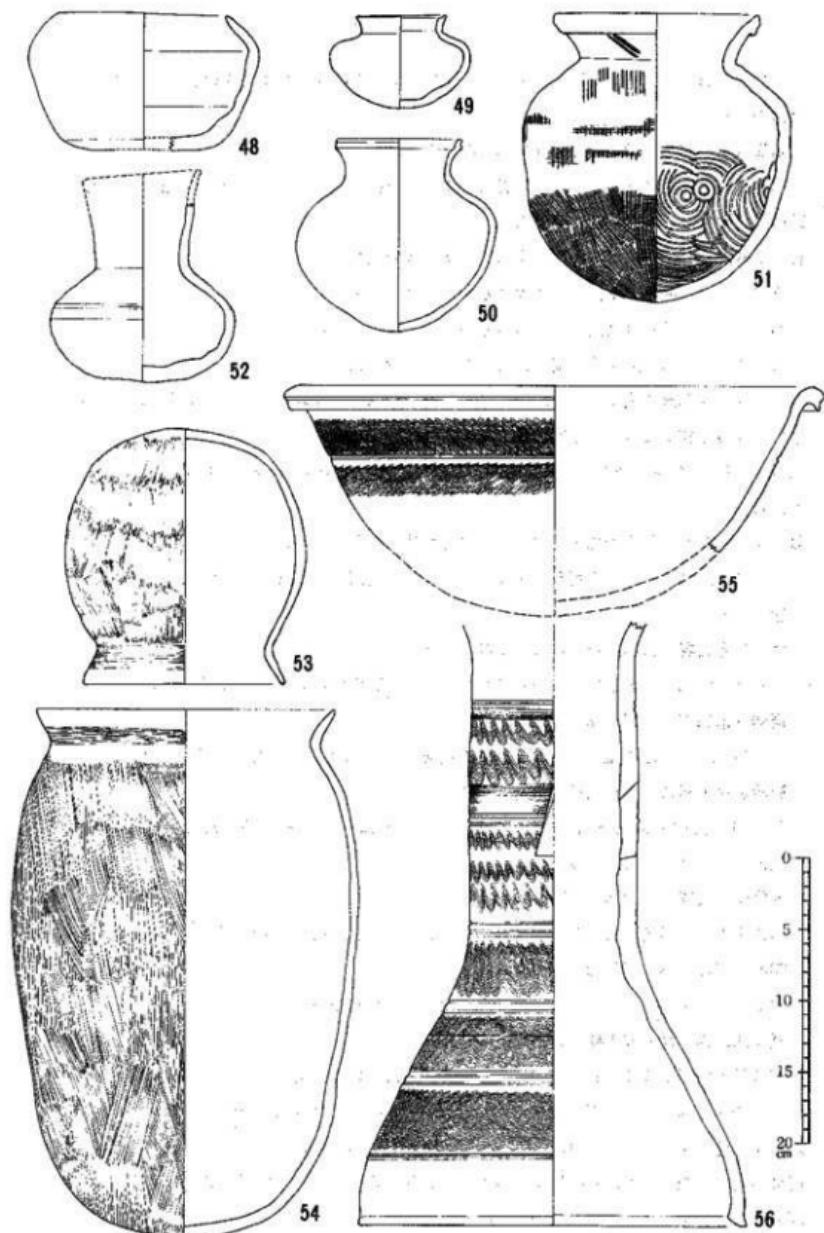
茎部長約3.2cm、茎の幅0.5～0.7cm、背部での厚さ2mm、刃部側で1.5mm。刃区を有し、刃部での幅0.9cm、刃渡8.6cm、背の厚さ4mmを計る。茎には木柄等の残痕が認められない。他に鉄釘等の出土もある。

### 切子玉（図版25）

長さ22mm、径12.5mmの碧石製で外面は腹部に棱を持つ12面体である。各面は正を意識して丸味を持たせて研磨を行ない、片方の小口面より円錐状の穿孔を行なっている。重さ4.3gである。

### 紡錘車（第13図24、図版25）

外径40.5mm、孔径7.5mmの滑石製の紡錘車で円錐台形を呈し裏面周縁部には、2つの同心円内に鋸歯紋の線刻が施されている。



第12図 出土土器実測図III

造構に伴わない古墳築造以前の遺物としては、旧石器時代～弥生時代の石器及び縄文式土器がある。

#### 石鐵（第13図1～13、第13図16）（図版26）（図版27）

本遺跡より出土する石鐵はすべて打製である。石材はサスカイトを用い、大阪府・奈良県境二上山地域に産出するものである。

石鐵は基部の形状、茎の有無を基準にして次の3分類を行った。

Aタイプ 回基無茎式 基辺が凹むもの (1～9)

Bタイプ 凸基有茎式 茎をもつもの (10～11・13)

Cタイプ 凸基無茎式 基辺が尖るもの (12・16)

Aタイプ 凹基無茎式に最大幅が基辺にあるもの7例、最大幅が基辺より上位にあり、基辺にむかって狭くなるもの2例(3), (6)である。

法量は、長さ14.0mm～27.5mm、幅10.5mm～19.5mm、厚さ2.0mm～5.0mm、重量0.4g～2.05gである。

Bタイプ 凸基有茎式で幅広で厚身のものと幅狭で厚身のもののタイプがある。

Cタイプ 凸基無茎式で逆刺が角をなすものと、逆刺部が角をなさずならかに下る柳葉形態を呈するものがある。

#### ナイフ形石器（第13図14～15）（図版27）

素材は翼状剝片で先端は尖り、基部も細く尖る。断面は台形及び三角形を呈する。

#### 擾器（第13図18）（図版28）

長さ58.0mm、幅42.0mm、厚さ17.0mm、重量46.32gで素材は厚い横長剝片を使用。

#### 翼状剝片・石核（第13図19～21）（図版28）

長さ40.5mm～54.0mm、幅41.5mm～51.5mm、厚さ15.5mm～22.0mm、重量35.27g～78.08gで両面又は一部に原礫面を残す。

#### 大型蛤刃石斧（第13図22）（図版30）

基部中央で破損後鉈石に転用。基部の一部分に元の面を残す打撃痕が著しい。

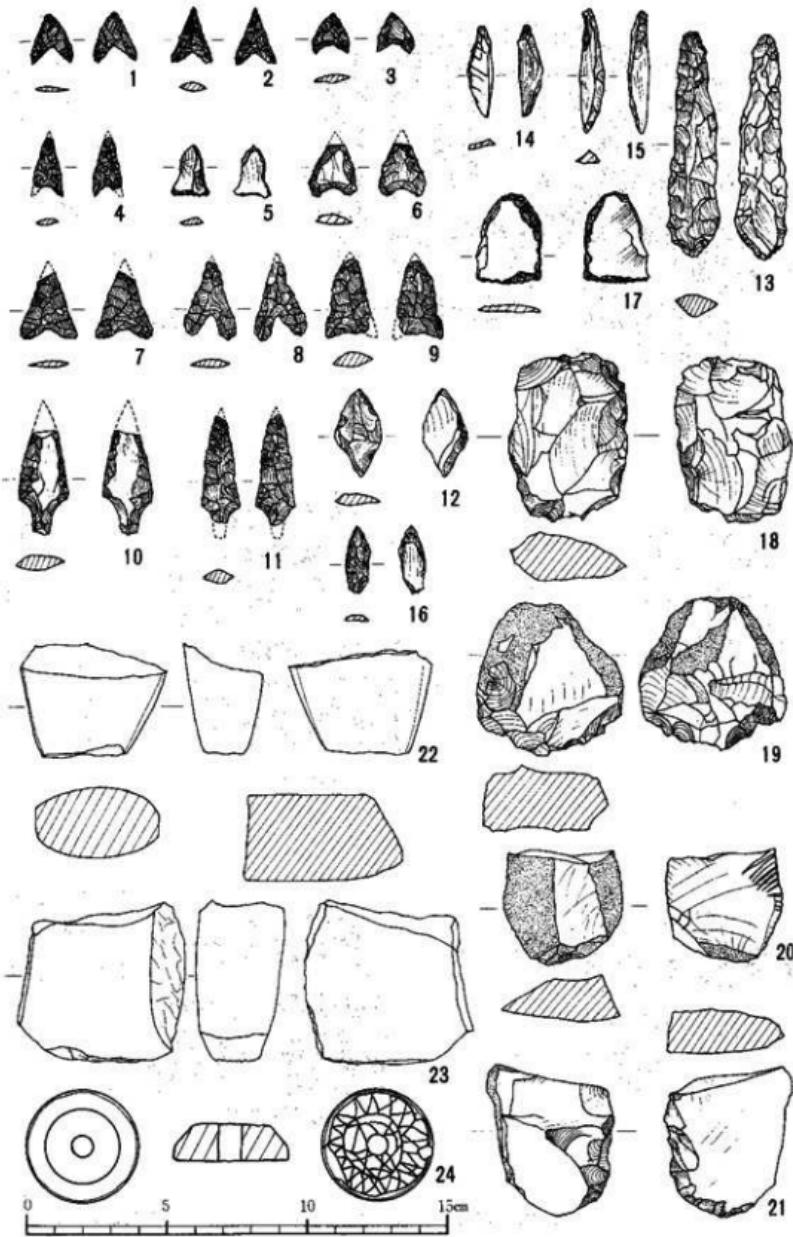
#### 叩石（第13図23）（図版30）

河原石を利用している。下端に打撃痕が残る。上端及び左右が欠損。

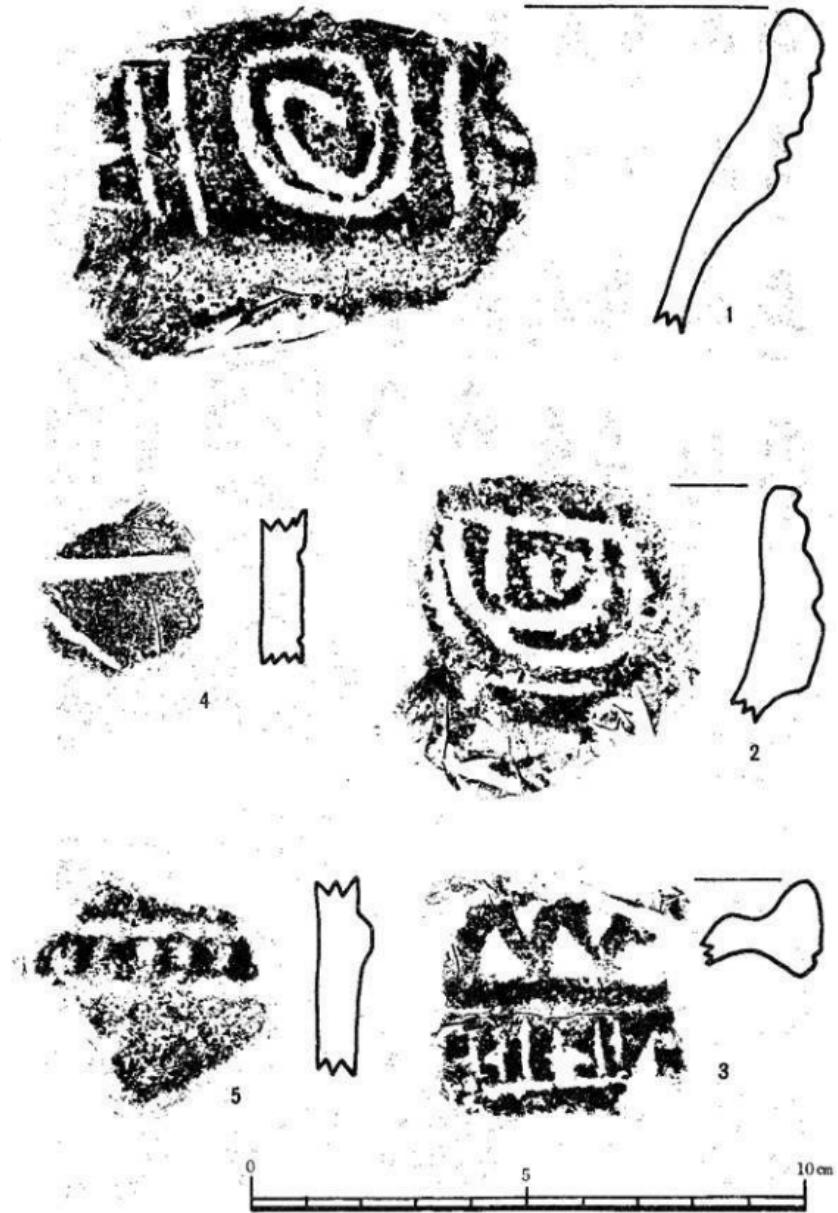
#### 縄文式土器・弥生式土器（第14図）

第2号墳周辺から縄文式土器約50片、弥生式土器約10片が出土している。

(1), (2)は肥厚した口縁部に渦巻文を施した深鉢で胎土に金雲母・角閃石を多く含む。色調は暗褐色。(4)は比較的器面の整えられた土器で磨消縄文が施されている。(5)は、深鉢の肩部の破片で刻み目のある凸帯をもつもの。(3)弥生式土器の底の口縁部で、外反する口縁部の端部を上下に拡張し、ヘラによる線刻を施している。



第13図 出土石器実測図



第14図 繩文式土器拓影

### 埴輪（第15図、図版32）

F-016地区の第2号周溝内から出土した16個の埴輪片はすべて円筒埴輪で、実測した埴輪は16個中の4例のみである。そこでここでは、形態分類よりもむしろ、その製作技法の観察に留意して説明する。技法の詳細を知るために成形、整形、調整の3作業に分けて述べる。

成形作業……粘土帯を円形に曲げて接合し、その上に粘土紐を巻きあげ突帯を付す時に指で押えて器形をつくる作業。

整形作業……成形時の胎土接合部の凹凸をなくす時に指や刷毛でその部分をナデ、器形の一部修正する作業。

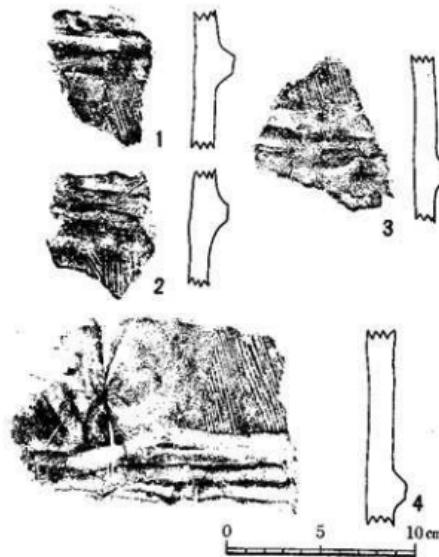
調整作業……内面は整形作業まで終る時が多いが、外面については突帯を含めて指や刷毛で全体に最後にナデ調整する作業。

1. 胎土は密。0.1~0.3cmの白色砂粒を多く含み、焼成は良く、器表面は赤褐色、内面は褐色を呈す。器外面は縦方向の継な刷毛目調整を施しており突帯部に指押え成形痕を残す。
2. 胎土は密。0.1cm程度の白色砂粒を器表面に多く含み、焼成は良く、内・外ともに褐色を呈す。径5.5cm前後の円孔を認める。器外面は縦方向の継な刷毛目調整を施している。
3. 胎土は密。0.1~0.3cmの白色砂粒を外・断面に多く含む。焼成は良く、器表面及び内部は淡褐色を呈す。

粘土帯の接合が難なため1部重複させている。器外面は縦方向に刷毛目調整を施す。

4. 胎土は密。0.1~0.6cmの白色砂粒及び小石を多く含む。焼成はやや粗で器表は淡褐色、内部は赤褐色を呈す。

器外面は縦方向の密な刷毛目調整を行ない、粘土帯の接合後指押えナデ整形を施す。



第15図 円筒埴輪拓影

## V まとめ

今回の調査で発見された遺構は、古墳時代後期の円墳2基、大溝1基、合口雙棺墓1基、奈良時代の落ち込み状遺構、建物跡、鎌倉時代末期～室町時代初頭の板枠井戸1基が確認され各遺構内から豊富な各種遺物が出土した。

とりわけ、本遺跡は奈良時代前期の正法寺跡がこれまでよく知られてきたが、寺跡の東端部に近い地域に双子塚の小字名や畠地から円筒埴輪片が採集されている。今回不良的ながらも2基の円墳が検出し得たことは予想外のことであり、当時の古墳のあり方については、四條畷市との隣接の大東市・寝屋川市・交野市においては生駒西麓斜面において古墳築造がなされているのに対し、四條畷市の生駒西麓については急斜面な為、古墳築造は不可能であると考えられていた。しかし、今回の調査において生駒西麓から派生する清滝丘陵上に比較的まとまりをもった古墳群を発見することができた。

とくに、今回検出した古墳群は清滝丘陵の中央部に立地しており、後の奈良時代に薬師寺式の伽藍配置をもつ大寺院を建立したため、その遺存状態は各遺構とも20～30cm程度の痕跡となり、平面的にもその形が破壊を受けていて古墳に伴う各種遺物は周溝内からの出土であって、主体部の検出ができなかったことは残念である。

これまで北河内における古墳群の発掘調査については、大東市堂山古墳群・交野市車塚古墳群の調査が実施されているが、古墳時代後期の円墳の調査が今一步進んでいない中にあって、本古墳群のあり方は少なからず重要な問題を提起する契機となることは必至であり、ここで今回の調査によって得られた成果を本概要報告書をしめくくることにしたい。

清滝古墳群第1号墳・第2号墳の築造年代についての問題であるが、周溝内及び埴丘肩部からの出土した土器編年からみて、第2号墳が6世紀初頭～中頃に築造を行ない。その後第1号墳が6世紀終り頃に築造したものと考えられる。このことは、円筒埴輪においても明らかである。川西宏幸氏の円筒埴輪総論において述べられている第V期のなかで新しく位置づけられた円筒埴輪にこの清滝古墳群第2号墳出土の円筒埴輪が該当し、第1号墳については円筒埴輪は伴なわないことになる。

1号合口雙棺墓の埋葬時期については、土師器甕及び長胴形甕からみて第2号墳と並行期にあたる6世紀中頃である。

こうした後期古墳築造年代から見て、2基の円墳及び周辺採集の円筒埴輪等において、この清滝丘陵には、ほぼ最後の時期の古墳群として1つの構成をもつものと考えられる。

第2に遺構に伴なわない縄文時代の遺構についてであるが、これまで知られているように清滝丘陵と忍ヶ丘丘陵の谷間に位置する南山下遺跡出土の縄文時代中期の遺跡と旗良川遺跡の後期後半～晩期にかけての遺跡の空白を埋める資料として、今後この調査地区周辺において縄文時代後期の遺構が近い将来において検出されることであろう。

一方、今回出土した古墳時代遺物をはじめ、各種遺物については、詳細にその観察表で述べているとおりである。

第2号墳周溝内検出の土塙内一括遺物については、第2号墳築造に際する供獻土器と考えられ、器種も須恵器蓋杯・土師器高杯の出土である。

次に、第2号墳周溝内から一頭分の馬の歯が出土したことについて少しく述べておきたい。馬については、古事記、日本書紀に6世紀の初めに河内馬飼首人荒籠の活躍したと記紀には書かれている。それより1時期古い5世紀後半において中野遺跡では馬の下顎とともに、多量の製塩土器も出土している。又、隣接地の奈良井遺跡において一辺約40mの方形周溝を有する古代祭祀遺構から、馬一体分及び頭骨がそれぞれ出土している。馬の出土状況は、馬一体分については一辺約2mの板の上に横位の状態で葬られているのに対し、頭骨については土塙を掘りその中に葬っていた。これらの資料と合わせて第2号墳周溝内に馬を葬ったものと考えられる。すなわち、5世紀後半～6世紀全般には生駒西麓と古代河内湖の間一帯には数多くの馬飼いを生業とするムラがあったことが伺うことができる。



第16図 正法寺字切図

# VI 観察表

土器

器種		蓋杯(蓋)	蓋杯(蓋)	蓋杯(蓋)
団及び団版番号		10-19 1	10-19 2	10-19 3
出土地区		E-17第2号埴土壙 黄褐色砂質土層	E-17第2号埴土壙 黒褐色砂質土層	D-16第2号埴丘肩部 褐色砂質土層
法量 (cm)	口 径 器 高 つまみ 径 つまみ 高	15.2 5.5	10.0 4.4	12.8 5.1
形態の特徴		口縁部は、ほぼ垂直に下がり端部は内傾する段を成す。 後は断面三角形を成し鋭い。天井部は高く丸い。	口縁部は外下方に下がり端部は内傾する段を成す。 天井部は高く丸い。	口縁部は垂直に下がった後、外寄し、端部は内傾する段を成す。 棱は沈線を有し、断面三角形で端部は鈍い。 天井部は高く平ら。
手法の特徴		マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部弦回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部弦回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部弦回転ヘラ削り調整。 内面中央部ナナ調整。 他は回転ナナ調整。
備考		胎土、密。微砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、黒灰色。	胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰白色。	胎土、密。0.1-0.3cmの白色砂粒及び0.5cmの小石を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。

蓋 杯 (蓋)	蓋 杯 (蓋)	蓋 杯 (蓋)	蓋 杯 (蓋)
10 - 19 4	10 - 19 5	10 - 19 6	10 - 19 7
F-16第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	F-16第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	F-15掘立柱建物跡 褐色砂質土層	F-16第2号埴周溝 淡褐色砂質土層
13.8 4.2	13.8 4.0	10.2 2.8 1.2 0.8	14.1 4.5
口縁部は、下外方に下がり端部は丸い。 天井部はやや高く丸い。	口縁部は、下外方に下がり端部は丸い。 天井部はやや低く平ら。	口縁端部は丸い。かえりは内傾して口縁端部よりやや高い。 天井部は低く丸い。 中央部にやや平らな擬宝珠様つまみを付す。	口縁部は、内凹気味に下外方にのび、端部は内傾する段を成す。 天井部はやや高く平ら。
マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約程度回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り調整。内面中央、同心円スタンプ。 他は回転ナデ調整。
胎土、密。0.1~0.3cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。	胎土、密。0.1~0.2cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。0.1~0.3cmの白色砂粒及び0.5cmの小石を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。

器種		蓋杯(蓋)	蓋杯(蓋)	蓋杯(蓋)
図及び図版番号		10-19 8	10-19 9	10-19 10
出土地区		E-15第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	F-16第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	E-17第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
法量 (cm)	口徑 器高 たちあがり高 受部径	16.0 4.8	14.0 4.4	12.8 3.7
形態の特徴		口縁部は、ほぼ直立に下がり端部は内傾する平面を成す。 棟は、沈線を有し端部は丸く鈍い。 天井部はやや高く平ら。	口縁部は、内側気味に下外方にのび端部は丸い。 天井部はやや高く丸い。	口縁部は、下外方に下がり端部は丸い。 天井部はやや低く平ら。
手法の特徴		マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面外回転ヘラ削り調整。 他は回転ナタ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面外回転ヘラ削り調整。 他は回転ナタ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面外回転ヘラ削り調整。 他は回転ナタ調整。
備考		胎土、密。0.1~0.3cm 白色砂粒及び0.5cm程度の小石を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰色。自然釉をかぶる。	胎土、やや密。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰色。	胎土、やや粗。 焼成、やや良好・堅緻。 色調、灰色。

蓋 杯 (蓋)	蓋 杯 (身)	蓋 杯 (身)	蓋 杯 (身)
10 - 19 11	10 - 19 12	10 - 20 13	10 - 20 14
F-16第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	F-16第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	F-16第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	E-15第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
14.0 3.6 0.9 14.0	11.8 4.7 0.9 14.0	11.0 4.6 0.9 14.0	10.9 5.2 1.7 13.4
口縁部は、内寄気味に 下外方にのび端部は丸い。 天井部は低くほぼ平ら。	たちあがりは、内傾し て立ち上がり、端部は 狭小でやや鋭い。 受部は立ち上りとの間 に段を成し、短く上外 方にのび端部は丸い。 底部は深く丸い。	たちあがりは、短く内 傾し端部はやや丸い。 受部はやや水平にのび 端部は丸い。 底部は深く丸い。	たちあがりは、内傾し て立ち上がり、端部は やや鋭い。 受部は上外方にのび端 部は丸い。 底部は深くやや平ら。
マキアゲ、ミズビキ成 形。 天井部外面を回転ヘラ 削り調整。 他は回転ナガ調整。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 底部外面を回転ヘラ削 り調整。 他は回転ナガ調整。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 底部外面を回転ヘラ削 り調整。 他は回転ナガ調整。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 底部外面を回転ヘラ削 り調整。 他は回転ナガ調整。
胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。0.1~0.3cm の白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、黒灰色。	胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。

器種		蓋杯(身)	蓋杯(身)	蓋杯(身)
団及び団版番号		10-20 15	10-20 16	10-20 17
出土地区		E-14第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	D-15第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	F-16第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
法量 (cm)	口徑 高 たちあがり高 受部径	12.2 5.3 1.5 14.8	11.0 4.7 1.7 12.8	12.0 4.4 1.2 14.2
形態の特徴		口縁部は、内傾後立ち上り、端部は内傾する段を成す。 受部はやや上方方にのび壠部は丸い。 底部は深く丸い。	たちあがりは、内傾し端部は内傾する段を成す。 受部はほぼ水平で壠部は丸い。 底部は深く平ら。	たちあがりは、内傾しやや長く端部は丸い。 受部はやや上方方にのび壠部は丸い。 底部はやや深く丸い。
手法の特徴		マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面%回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面%回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面%回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整
備考		胎土、密。0.1~0.3cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰白色。	胎土、やや粗。0.1~0.3cm程度の白色砂粒及び0.5cmの小石粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、淡黄灰色。 底部に「ノ」のヘラ記号有

蓋杯(身)	蓋杯(身)	蓋杯(身)	蓋杯(身)
10 - 20 18	10 - 20 19	10 - 20 20	10 - 20 21
F-16第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	F-16第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	F-15第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	E-17第2号埴土壤 黑褐色砂質土層
11.6 4.0 0.9 14.4	12.0 4.0 0.9 14.4	14.6 4.5 1.7 17.0	12.4 5.8 1.7 15.6
たちあがりは、短く内傾し端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。	たちあがりは、短く内傾し端部はやや丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。	たちあがりは、内傾し端部は内傾する平面を成す。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部は浅く平ら。	たちあがりは、内傾し端部は内傾する平面を成す。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部は深く平ら。
マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面弓回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面弓回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面弓回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面弓回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。
胎土、やや粗。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰色。	胎土、やや密。0.1 ~ 0.3 cm程度の白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、黒灰色。	胎土、密。0.2 ~ 0.5 cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。0.2 ~ 0.4 cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。

器種	蓋杯(身)	蓋杯(身)	蓋杯(身)	
図及び図版番号	10-20 22	10-20 23	10-20 24	
出土地区	D-18 大溝 褐色砂質土層	E-14第2号墳 淡褐色砂質土層	E-17第2号墳 黒褐色砂質土層	
法量(cm)	口徑 器高 たちあがり高 受部径	11.2 4.4 1.6 15.2	12.0 4.2 0.6 14.6	9.8 4.4 2.0 12.2
形態の特徴	たちあがりは、内傾して立ち上がり端部はやや鋭い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。	たちあがりは、短く内傾し端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや深く平ら。	たちあがりは、内寄味に立ち上がり端部は内傾する凹面を成す。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや深く平ら。	
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	
備考	胎土、やや粗。 焼成、良好・堅緻。 色調、白灰色。	胎土、粗。0.1~0.5cmの白色砂粒及び1cmの小石粒を含む。 焼成、やや軟質。 色調、灰白色。	胎土、密。0.2~0.4cmの砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰白色。	

土 師 器 械	装飾付壺(装飾部)	装飾付壺(装飾部)	短 頭 壺
10 - 21 25	10 - 21 26	10 - 21 27	10 - 21 28
F-16第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	D-15第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	D-15第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	E-17第2号埴周溝 淡褐色砂質土層
10.8 3.7 体部径 11.2	残存高 7.0 基部径 4.2 体部径 6.6	6.8 残存高 6.5 体部径 5.7	8.4 8.0 体部径 13.8
口縁部は、全体に浅い 皿状を呈し、口縁部は 内寄気味に立ち上がり 丸い。 体部は、平坦な平底か ら丸くゆるやかにのび て口縁部へ続く。	口縁部は外反して上外 方にのびる。端部欠損 のため不明。 最大径は体部上位の位 置にある。 底部に接合部の剥離痕 がみられる。	口縁部はやや内傾後上 外方にのびる。端部は 丸い。 底部はやや深く接合部 の剥離痕がみられる。	口縁部は短く上外方に のび端部は丸い。 体部はなだらかに下がり 最大径を上半に求める。 底部は丸い。
内外面ともにナテ調整 が施されている。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 体部等不整方向のナテ 調整。 他は回転ナテ調整。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 体部等不整方向のナテ 調整。 他は回転ナテ調整。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 体部下方回転ヘラ削り 調整後回転ナテ調整。 底部回転ヘラ削り調整。 他は回転ナテ調整。
胎土、密。0.1~0.6cm の白色砂粒を多く含む。 焼成、良好。 色調、赤味のある茶褐色。	胎土、密。0.1~0.4cm の白色砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、内・外・黒灰色。 斷・茶灰色。 一部自然難かぶる。	胎土、密。0.1~0.3cm の白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、内・外・黒灰色。 断・茶灰色。 一部自然難かぶる。	胎土、密。0.1~0.2cm 程度の白色砂粒を多く 含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰褐色。

器種		貯	貯	貯
国及び図版番号		10-21 29	10-21 30	10-22 31
出土地区	G-13第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	F-12第1号墳周溝 青灰色砂質土層	E-17第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	
法量 (cm)	口径 残存高 基部径 体部最大径	(12.5) 16.0 4.0 9.2	(13.0) 17.0 3.5 9.1	16.0 4.1 10.7
形態の特徴	器胴肩部に凹縫と核をもち下半に1条の凹線を施らせ、その間に小円孔1と輪状施文具による斜傾刺突文が施されている。口縫部は欠損しているが器形からみて口縫部と頸部の間に核をもつ頸部上に2条、下に1条の凹線によって3区分されている。頸部上段は斜傾ヘラ削文。	基部の細くしまった頸部は外反しつつ外上方へのびる。 内外面ともに回転ナダによる調整が施されている。 胸部は肩のはる。器体は尖がり気味の丸底で体部に2.0×1.6cmの凹孔を穿っている。	口縫部は外寄氣味に外上方にのび口縫部に至る。口縫部は欠損のため不明。 頸部にやや鋭角に外上方にのびる。体部は丸味をもち、体部最大径が中位に位置する。 底部は丸底で、中位に凹孔を穿っている。	
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縫部ハリフケ。 回転ナダ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縫部ハリフケ。 体部外面外ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縫部ハリフケ。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	
備考	胎土、密。0.1~0.3cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、灰褐色。	胎土、密。0.5cmの白色小石粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。0.1~0.5cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、内・外灰青色。	

長 頸 壺	高 杯	高 杯	高 杯
10 - 22 32	10 - 22 33	10 - 22 34	10 - 22 35
E-17第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	D-15第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	E-17第2号埴土質 黑褐色砂質土層	E-14第2号埴周溝 淡褐色砂質土層
残存高 18.0 体部最大径 16.2	口 径 10.4 器 高 13.5 脚部径 9.6 脚部高 9.2	口 径 14.6 器 高 10.8 脚部径 11.3 杯部高 3.3	口 径 13.4 器 高 8.6 脚部径 11.1 杯部高 3.4
口頸部は外寄りして上方に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は欠損のため不明。 肩部は口頸部と約115°にひらき気味をもって下外方に下がり、体部中位に最大径を成し下内方にのびる。 底部は丸底である。	(杯部) 口縁部は外反して立ち上がり丸く至る。 中位に1条の凸線を有し、凸線下に1条、4本の波状文を施す。 脚部、基部細く細長く外反して下がり端部は丸い。三方には長方形のスカシを有す。	(杯部) 水平方向にのびる。杯底よりゆるやかに外上方へひらく。 杯部は底部と口縁部の境は明瞭ではない。 内外面ともに磨耗がひどく調整は不明。 (脚部) 脚柱部からゆるやかに裾部に至り、端部はヘラ削りされ方形にちかくとじる。杯部との接合部に押しき痕がみられる。 脚柱部外面は輻方向の刷毛目が施され、端部はゆるくナデ調整が行われている。	(杯部) 浅い杯部で底部と口縁部の境がなく、脚部から外上方へのびて口縁環部に至る。 底部内面はナデ調整。 口縁部付近は内外面ともにミズビキに類似した回転ナデ調整。 外面下半は脚部を挿入した後、刷毛目を施している。 (脚部) 脚柱部からゆるやかに裾部に至り、端部はヘラ切りされた方形にちかくとじる。 脚柱部外面は刷毛目の上をヘラ磨きしており、裾部外面はナデ調整。 脚柱部内面はヘラ削り。
マキアゲ、ミズビキ成形。 体部外面をヘラ削り調整後、回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。		
胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、暗灰色。 肩部に灰かぶり。	胎土、密。微砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、黒灰青色。	胎土、密。0.1~0.3cmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、淡赤褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、黄褐色。

器種	高杯	高杯	甕
國及び國版番号	10-22 36	10-23 37	10-23 38
出土地区	E-14第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	E-17第2号墳土壤 黒褐色砂質土層	E-14第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
法量(cm)	残存高 6.7 脚部径 7.8 脚部高 5.5	裾部径 11.4 脚部高 9.1	口徑 11.6 器高 8.3 胴径 10.8 口縁部高 2.0 脚部高 6.3
形態の特徴	(杯部) 口縁部は不明。 体部は丸底気味の平底から外反して立ち上がる。脚部、基部細く細長く外反して下がり端部にまる。 脚部に円形のスカシを二方に穿っている。	(脚部) 脚柱部上半が中実の脚部で脚柱部はほとんどひらかずに裾部でひろがり、脚柱部に握りしめた痕跡があり縱方向の刷毛目で雄部まで施されている。 内面はヘラ削りの後ナデ調整が施されている。	(口縁部) 基部で外身しまるみをもって立ち上がる。口縁部の中位に最大径をもつ。 外面ともにナデ調整が施されているが、内面基部には胴部外面の刷毛目と同じ刷毛原体を用いた刷毛目が残っている。 (脚部) 脚のはらない脚部はゆるやかな丸味をもって垂下し、やや平底に近い。 外面は縱方向の刷毛目が施されている。 内面はヘラで削った後部分的にナデ調整している。
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。 脚部ハリツケによる。		
備考	胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、内・淡灰褐色。 外・暗緑色。 断、灰色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、黄褐色。	胎土、密。0.1~0.2cm程度の砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、褐色。 10×8の黒色斑。

概	要	要	黒色土器
23 39	11-23 40	11-23 41	11-23 42
E-14第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	F-15第2号埴周溝 淡褐色砂質土層	F-14落ち込み状造構 褐色砂質土層	E-12第1号埴上層 淡褐色砂質土層
口 径 14.6 器 高 7.5	口 径 12.6 器 高 17.5 胴 径 15.6 口縁部高 3.0 胴 部 高 14.5	口 径 14.6 胴 径 20.4 残存高 6.5	口 径 22.0 器 高 5.7
(口縁部) わざかに外反して端部は肥厚して丸くとじる。 (体部) 底部は少し平坦な面をもつが全体に球形を呈す。巻き上げ法によって成形され、外面はヘラ削り後ナデ調整を行なう。 外面は指整形の後調整は行なっていない。そのため、粘土紐接合痕がなきり残っている。	(口縁部) 基部でゆるやかに外折し外上方へ短くのびる。 内外面ともにナデ調整を施され肩との境にかかるな段をもつ。 (胴部) 最大径を中位にもち球形丸底を呈す。 外面は全体に細かい刷毛目が乱方向に施され、内面はヘラ削り後ナデ調整が施され指圧痕を認める。	(口縁部) 「く」の字に外折し端部で上方へつまみあけた様に肥厚する。いわゆる「S字口縁」の形態で基部外面はヘラでナデ調整されているため窪む。 (胴部) 球形を呈すると考えられる。 口縁部との接合部分は肥厚している。外面はヘラ削りのあとが残る。	(口縁部) 口縁附近は刷毛の横ナデを施されている。 内外面ともにヘラ磨きを調整を行なう。 (体部) 底部は少く平坦な面をもつ底部外面に指紋が残っている。 底部外面にラセン状にヘラ磨き。 外面口縁附近に薙が付着内面は黒色。
胎土、密。 焼成、良好。 色調、外面・褐色。 内面・赤褐色。	胎土、密。0.1~0.3cmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、茶褐色。	胎土、密。0.1~0.5cmの砂粒及び小石を含む。 焼成、良好。 色調、茶褐色。 全体にススが付着。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、外面・褐色。 内面・黒色。

器種	片口大鉢	甕	甕
図及び図版番号	11-23 43	11 44	11 45
出土地区	E-17第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	E-15第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	F-13第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
法量(cm)	口径 21.8 器高 11.6 体部径 22.6	口径 22.6 残存高 7.3	口径 23.0 残存高 10.0
形態の特徴	(口縁部) 片口の口縁部で内寄ぎみに立ち上がり端部は丸くおわる。 (体部) 底部は平らで最大径は上位に位置する。	口頭部は上外方にのび端部近くでやや下外方に短く下がり、更に上外方にのび内傾して端部は丸い。 肩部は約115°を成して張り出す。	口頭部は外弯して立ち上がり、口縁部下外方に稍曲させ端部は丸い。 肩部はほぼ120°を成して張り出す。
手法の特徴	内面はナデ調整、外面は刷毛目が施されている。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。 内面肩部青海波文の一部が残る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。
備考	胎土、密。0.1~0.2cmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、赤褐色。	胎土、密。 焼成、良好・堅緻。 色調、薄灰茶色。	胎土、密。0.1~0.3cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、薄灰茶色。

型	型	輪	短頭型
11 46	11 47	12 48	12 - 25 49
G-13第1号墳周溝 青灰色砂質土層	G-13第1号墳周溝 青灰色砂質土層	E-14第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	E-16第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
口 径 40.0 残存高 23.3 基部径 23.0	口 径 44.0 残存高 24.4 基部径 32.8	口 径 11.4 器 高 10.1	口 径 6.2 器 高 6.9 基 部 径 5.8 口頭部高 1.4
外面の3%・5%に1条の 凸線、端部下方に2条の 凸線を有す。 端部は丸く肥厚する。 凸線の間にはヘラ描文 が施されている。	口頭部は外刃気味に外 傾し、外上方にのびそ の端部で外下方に屈曲 し、さらに外上方にの び口縁部に至る。 端部は内傾しながら び丸くおわる。 口頭部に2条の凹線、 口縁部下に2条の凸線 を有す。その間に1条 1本の波状文を有す。	口縫部は内寄し端部は 丸い。 底部は平らで最大径は 上位に位置する。	口頭部は基部より上外 方へ外刃し端部は内傾 する段を有す。 肩部は約100°の角度で のび、最大径は%上位 に有し底部は丸味をも つ。
マキアゲ、ミズビキ成 形。 肩部内面に凹弧タキ の一部が残る。 他は回転ナゲ調整。 口頭部ハリツケ。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 回転ナゲ調整。 口頭部ハリツケ。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 底部外側回転ヘラ削り。 底部と体部の境界約1.5 cmはヘラ削り調整。 他は内・外面とも回転 ナゲ調整。	マキアゲ、ミズビキ成 形。 体部内面凹無調整。 他は回転ナゲ調整。
胎土、密。 焼成、良好。 色調、暗灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、内・外 灰黑色。 断、灰色。	胎土、密。0.1~0.3cm の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、やや密。0.1~ 0.2cmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、内・灰青色。 外、暗青灰色。 断、灰茶色。 底部にヘラ記号〔×〕

器種	短頭蓋	窓	長頭蓋
図及び図版番号	12-25 50	12-24 51	12-24 52
出土地区	E-14第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	E-15第2号墳周溝 淡褐色砂質土層	F-15第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
法 葉 (cm)	口 径 8.0 器 高 13.5 体部径 14.6	口 径 14.4 器 高 20.3 基 部 径 11.0 口頭部高 3.5	残存高 12.5 基 部 径 6.8 体部最大径 12.9
形態の特徴	口頭基部より内傾して立ち上がり、更に外反してのびたのち、端部付近で外方へ屈曲して明瞭な端部の丸い棱を呈し鈍い棱を有して端部で直立する。端部は丸い。 肩部は外下方に張り出す。底部は丸底を呈し外上方にのび肩部に至る。 体部最大径は上位に位置する。	口頭部は上外方にのび口縁部で少し屈曲したのち上外方にのび端部でやや内傾する。端部は丸い。 肩部はI頭部と「く」の字形を成して下外方に下り肩部と体部の境で最大径を成し内寄しながら下方に下がる。 底部は丸く不安定。	口頭部は、基部よりほぼ垂直にのび口縁部は欠損。 肩部はゆるやかに下外方に下り、最大径は体部上位に有し1条の凹線を有す。 底部は丸味をもつ。
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 I頭部ハリツケ。 底部外面回転ヘラ削り調整。 内面叩きの痕跡あり。 他は回転ナデ調整。	内面体部%～外面、口縁、I頭部回転ナデ。 外面肩部～体部%かき目調整(7条/1cm)後平行タタキ調整(4条/1cm)のあとスリケシナデ。 外面体部%～底部にかけてかき目調整後平行タタキ調整。内面体部%～底部に円弧文・同心円タタキ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部外面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。
備考	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、内・外、灰白色。 断・灰色。 外面頭部に2本のヘラ記号	胎土、粗。0.1～0.3cmの白色砂粒及び0.5cmの小石粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、内・灰色。 外、断・白灰色。

棗	棗	器台(台部)	器台(脚部)
12	12	12	12
53	54	55	56
E-14 合口壺檜葉 黄褐色砂質土層	E-14 合口壺檜葉 黄褐色砂質土層	D-15 第2号埴岡溝 淡褐色砂質土層	G-13 第1号埴岡溝 青灰色砂質土層
口 径 14.0 器 高 17.9 胴 径 17.0	口 径 20.8 器 高 37.0 胴 径 24.6	口 径 36.0 残存高 11.5	残存高 42.0 脚底径 27.4
(口縁部)「く」の字に外折し、外上方へひらがる。胴部との接合部の外面に縱方向の刷毛目がナデ調整の間に残在する。 (胴部)最大径を肩に有する球形の丸底。最大径より下に乱方向の刷毛目が施され、内面はナデ調整。	単純に外反する口縁部で端部は丸い。 外面にナデ調整が施されている。 胴部は胴長の器体で丸底。 全体に縱方向の刷毛目が施され、内面はヘラ削りののちナデ調整が施されている。	台部は上外方にのび中位に1条の同線を有する口縁、体部を有する。外下方に削曲し外断面は凸状をなす。 中位四綫の上方に1条(21~25本)下に1条(15~19本)の波状文を施す。	脚部は細い筒部で基部で大きく内寄して開き端部は内傾する平面を成す。 脚部には2条づつの凹縫を6帯付け、6区に分けていてその間に三角透をおこなっている。 波状文は上から2条(5本、7本)、3条(5本、6本、6本)、1条(19本)、2条(11本、16本)1条(35本)を数える。
胎土、密。 焼成、良好。 色調、黄灰褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、黄灰褐色。	胎土、密。0.2cm程度の砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、外 青灰色。 内 灰かぶり。 断 灰白色。	胎土、密。砂粒を含む。 焼成、良好・堅緻。 色調、外 墙灰色。 内・断 灰色。

## 石器

団版	名 称	法量 (mm)	重量 (g)	形 態・調 整	出土地区
13-26 1	石 錐	長さ 17.5 幅 15.0 厚さ 2.0	0.5	○先端は鈍い。○ A面は調整面よりなり中央に鋸が通る。○ A面左側邊の刻離はほぼ一定で整っている。○両側邊でスラップ状を呈する。	E-12
13-26 2	石 錐	長さ 19.5 幅 14.5 厚さ 3.0	0.6	○先端は鋭い。○側邊は直線にのび逆刺は粗長く鋭い。○基辺は台形状に深く凹む。○ A面は右方に打点を持つ主要刻面で周辺に小さな調整刻離を施す。○先端部から基部にかけて鋸が通る。○細かな鋸齒状を呈する。	C-15
13-26 3	石 錐	長さ 14.0 幅 13.5 厚さ 3.5	0.45	○先端は鋭い。○ A面は調整面よりなり中央に鋸が通る。○ B面右側に左方打点を持つ大刻離面が残る。○基辺の刻離は小さい。	C-15
13-26 4	石 錐	長さ 21.0 幅 10.5 厚さ 2.5	0.4	○小型。○両平面共に調整刻離は全体におよび特に A面では整っている。○両平面中央に鋸が通る。○左逆刺に比べ右逆刺は鋭く、又長いと考えられる。	F-12
13-26 5	石 錐	長さ 17.0 幅 13.5 厚さ 2.5	0.55	○逆刺は鈍い。○中央に大刻離面が残る。○両側邊共に刻離は小さく中央にのびない。○右側邊の刻離は急角度に入っている。○ B面は刻離は小さく中央にのびない。	G-13
13-26 6	石 錐	長さ 18.0 幅 16.5 厚さ 3.3	1.45	○ A面基部中央に大きく打ち欠き。○ B面は調整面からなる。○右側邊上半は深いステップ状を呈し基部右に大刻離面が残る。○両側邊の逆刺部分は磨滅。	E-17
13-26 7	石 錐	長さ 23.5 幅 19.5 厚さ 2.5	1.07	○両平面共に調整刻離は全体におよび両面共に鋸が通るが、ステップ状を呈する刻離が混在する。○ B面左側邊沿いには更に細かな調整刻離が施されている。○両側邊の逆刺部分は磨耗。	F-14
13-26 8	石 錐	長さ 27.0 幅 18.5 厚さ 2.5	1.02	○両平面共に調整刻離は全体におよび、特に A面は整っている。○両平面中央に鋸が通る。○左逆刺に比べ右逆刺は細く長い。	E-15

図版	名 称	法 品 (mm)	重 量 (g)	形 態・調 整	出 土 地 区
13-26 9	石 織	長さ 27.5 幅 15.0 厚さ 5.0	2.05	○ A面の先端部から基部にかけて細長く大剝離面が残る。○両面共に剝離面の大きさはほぼそろっている。○基部に最大厚あり。	E-14
13-26 10	石 織	長さ 37.0 幅 17.5 厚さ 5.5	3.54	○大型。○幅広。○薄い。○両面共に押圧剝離が施され揃った剝離面よりなる。○B面基部中央に大剝離面残存。○両側辺には細かく揃った押圧剝離が施される。○鋒は両面共通。○逆刃のエッジは磨滅。○先端はA面側へ折れ欠損。	F-13
13-26 11	石 織	長さ 38.5 幅 13.5 厚さ 5.0	2.37	○大型。○細身。○厚みがある。○基部で最大厚を測り、先端にゆくにつれて薄くなる。○全体に丁寧な剝離が施され、剝離面は揃っている。○両面ともに鋒が通る。○側辺は駆削状を呈す。	D-15
13-26 12	石 織	長さ 30.5 幅 16.5 厚さ 4.0	1.72	○幅広。○薄い。○両側辺は「く」の字形に屈曲する。○先端部はややふくらみ気味で基部は直線的である。○両面とも薄い調整剝離。○両面とも両側辺にうすいステップ状剝離面が残る。○両側辺のエッジは磨滅。	D-14
13-26 13	石 織	長さ 81.0 幅 17.5 厚さ 8.0	9.34	○大型。○細身。○厚みがあり基部で最大厚を測る。○両面ともに剝離は中央部までび大剝離面を留めず。○鋒は両面とも明瞭である。○剝離面は揃っている。○側辺のエッジは磨滅している。	F-16
13-27 14	ナイフ形 石器	長さ 32.5 幅 9.0 厚さ 2.0	1.05	○素材は翼状剝片。○両面に横線をもつ。○先端は尖る。○基部は細く尖る。○原跡面を残す。○断面は台形。	E-14
13-27 15	ナイフ形 石器	長さ 44.0 幅 8.0 厚さ 5.0	1.70	○素材は翼状剝片。○横線に打撃痕あり。○先端は尖る。○基部は細く尖る。○刃部はやや外彎する。○背部調整は両面からおこなわれ、剝離痕あり。○断面三角形。	F-16

図版	名 称	法量 (mm)	重量 (g)	形 態・調 整	出土地区
13-27 16	石 織	長さ 23.5 幅 8.5 厚さ 2.0	0.7	○柳葉形を呈す。○ A面は両側辺より調整剝離。 ○ B面中央に大剥離面残存。○ A面両側辺にス テップ状を呈す。○両側辺ともジグザグを呈す。	E-12
13-28 17	翼状剥片	長さ 50.0 幅 43.5 厚さ 15.5	43.0	○上端部の刃縁が内寄する。○両面とも大剥離 が施されている。	F-14
13-28 18	搔 器	長さ 58.0 幅 42.0 厚さ 17.0	46.32	○素材は厚い横長剥片。 ○刀部は、A面側から急角度に調整している。	D-18
13-28 19	翼状剥片 石核	長さ 54.0 幅 51.5 厚さ 22.0	78.08	○素材は平行四辺形な壁。○両面に原礫面あり。 ○下端の大きな剝離は、破損後両面側から打撃 をおこなっている。	C-14
13-28 20	翼状剥片 石核	長さ 40.5 幅 41.5 厚さ 16.5	35.27	○不整形。○ A面に剝離面と原礫面あり。 ○打面は平担。	E-15
13-28 21	翼状剥片	長さ 50.0 幅 43.5 厚さ 15.5	43.0	○下端部の刃縁が内寄する。○ A面左端部に原 礫面を残す。○断面は変形な平行四辺形。	F-15
13-30 22	大型船刃 石斧	長さ 40.0 幅 50.5 厚さ 27.0	72.2	○基部中央で直横に破損後、砧石に転用。○基 部は一部分に元の面を残すが打撃痕が著しくそ の周囲に剝離もみられる。	E-15
13-30 23	叩 石	長さ 57.0 幅 57.5 厚さ 30.0	165.32	○河原石。○打撃痕が下端に残存。○上端及び 左右が欠損。	E-17
13-24 24	紡 織 申	外径 40.5 孔径 7.5 厚さ 13.5	33.4	○完形。○円錐台形を呈し、側面は直角に下がる。 (幅 3~4 mm)。○ A面傾斜面には中心より放射 状にのび、側面では稜線と直交する方向に表面 が削り取られている。○側面の研磨は横方向であ る。○ B面周縁部には、2つの同心円内に螺旋 紋の線刻が施されている。	E-17 第2号墳 周溝

圖 版



図版1 遺跡周辺の航空写真



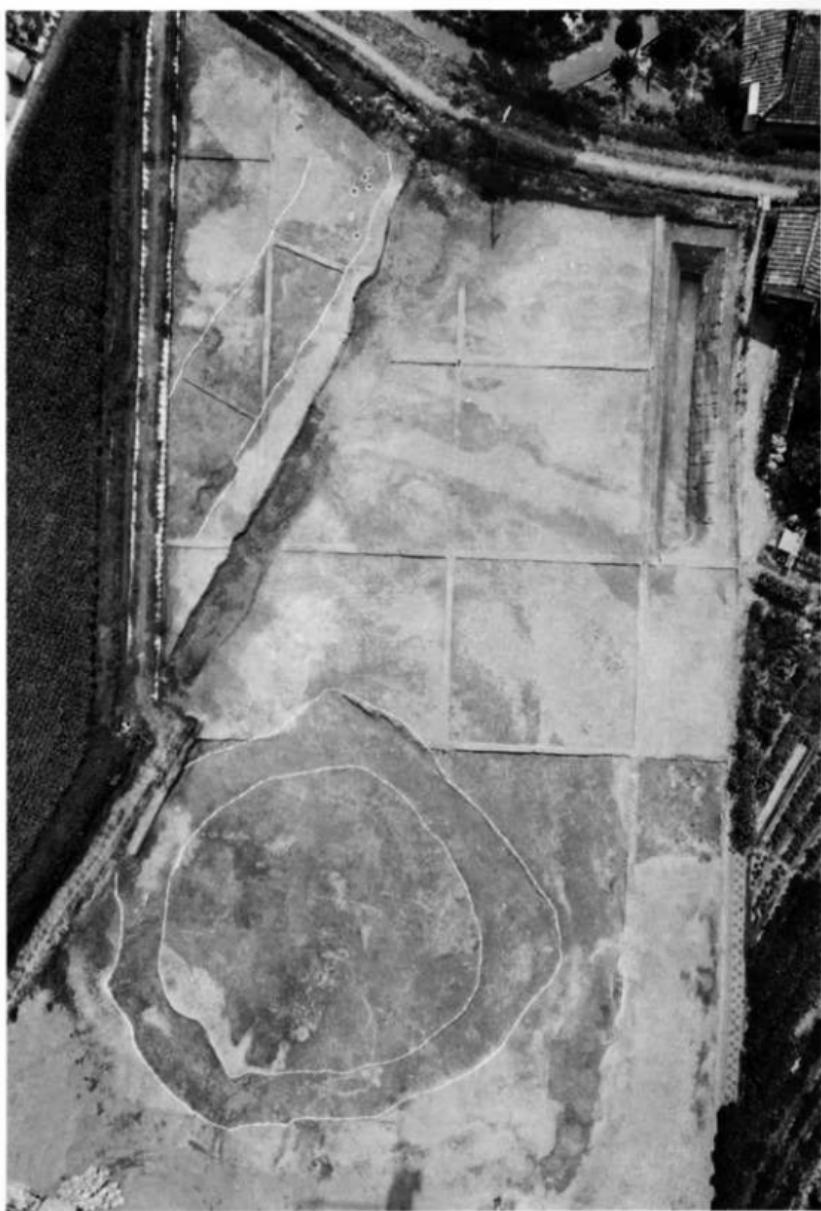


(南方上空から)

圖版 3 清澗古墳群第1號墳航空写真



圖版4  
清澗古墳群第2号墳・大溝航空写真





1. (南方上空から)

2. (西方上空から)



1. (東方上空から)

2. (西方上空から)



(南から)



(南東から)





(東から)



(南東から)





(東から)



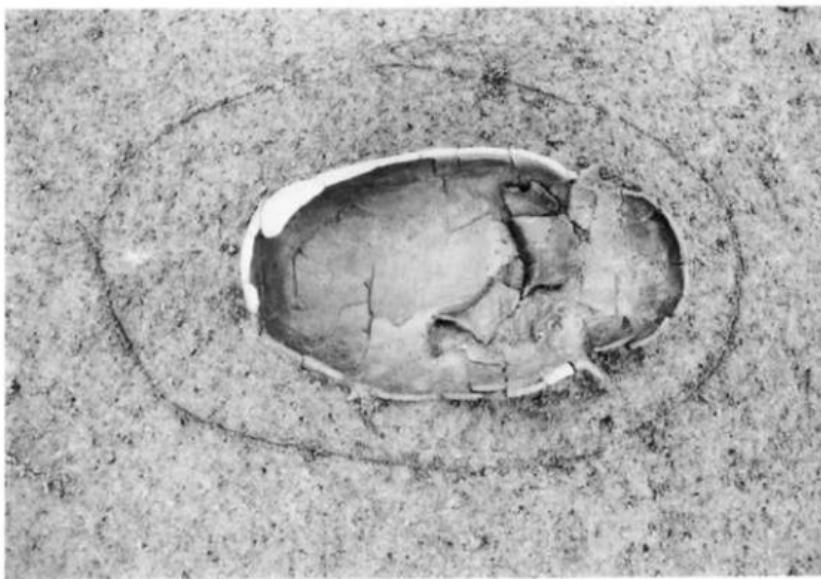
(西から)



(北から)



(西から)



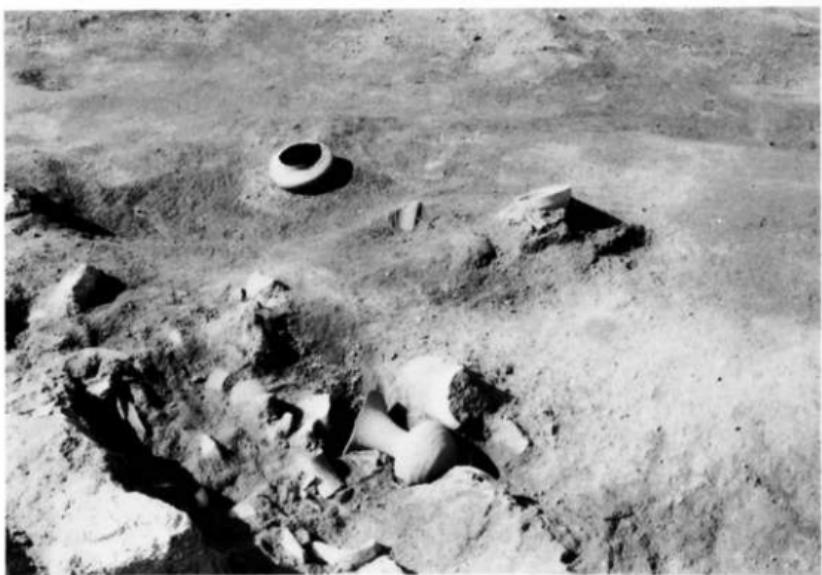




1. 第2号墳埋葬施設

2. 第2号墳土器出土状況

清澗古墳群第2號墳周溝底土器出土狀況

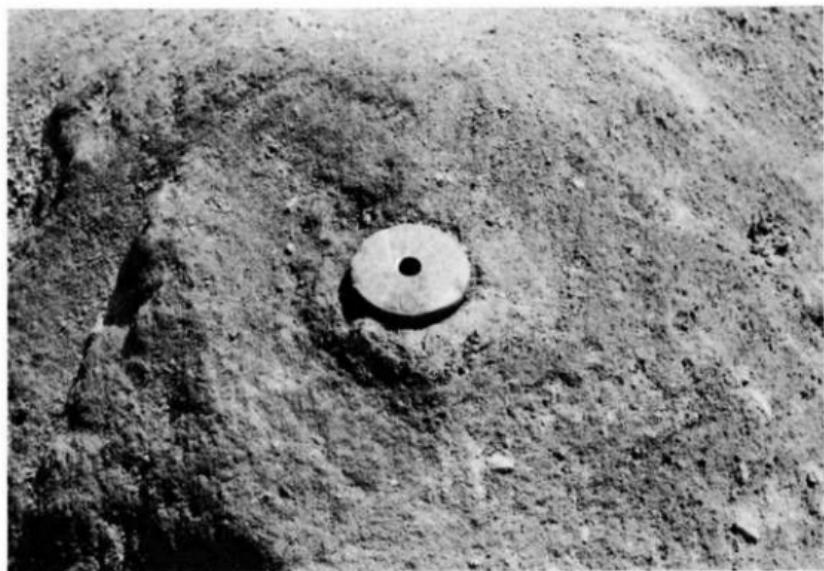


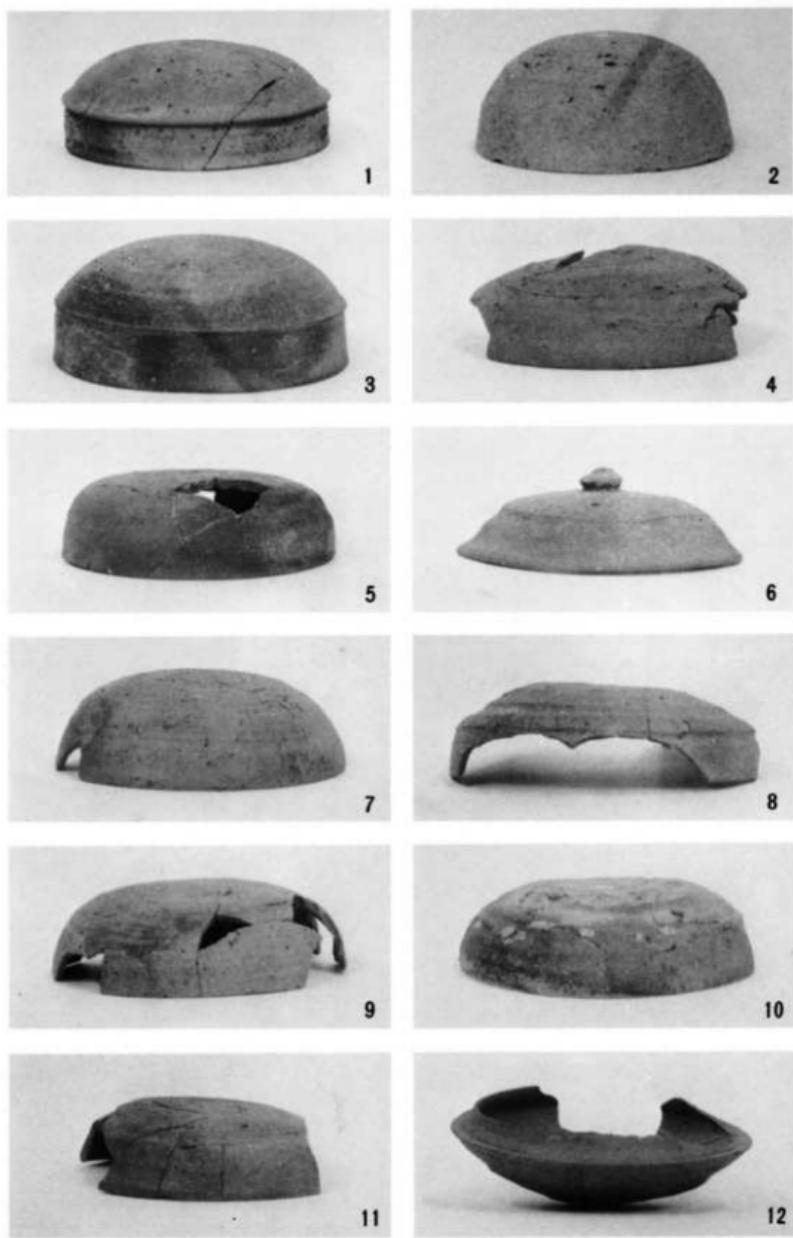
圖版 17 清滌古墳群第1號墳・第2號墳周溝底土器出土狀況

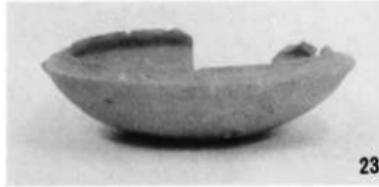


1. 第2号墳

2. 第1号墳





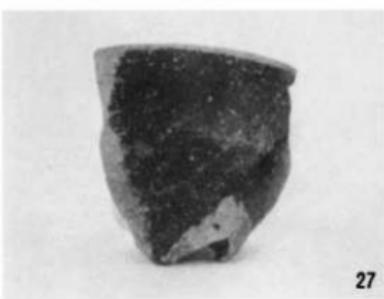




25



26



27



28



29



30

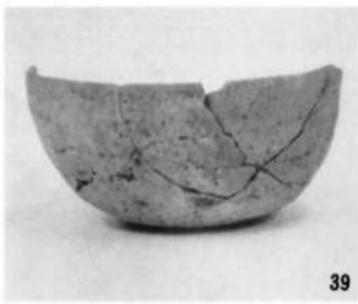




37



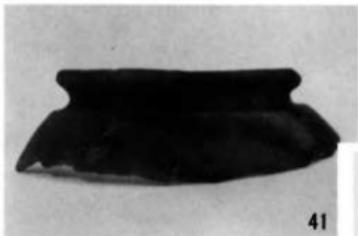
38



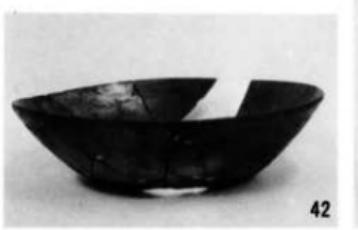
39



40



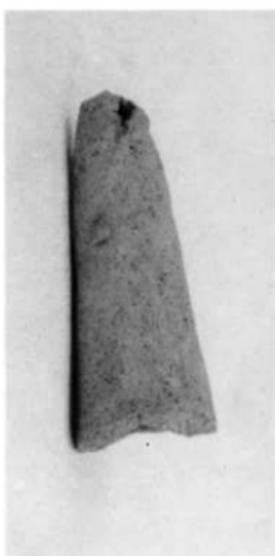
41



42



43



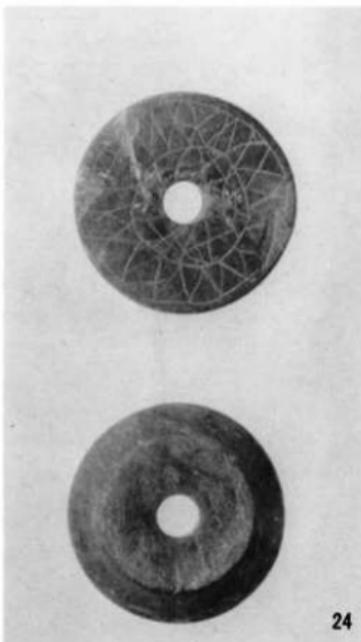
51



52



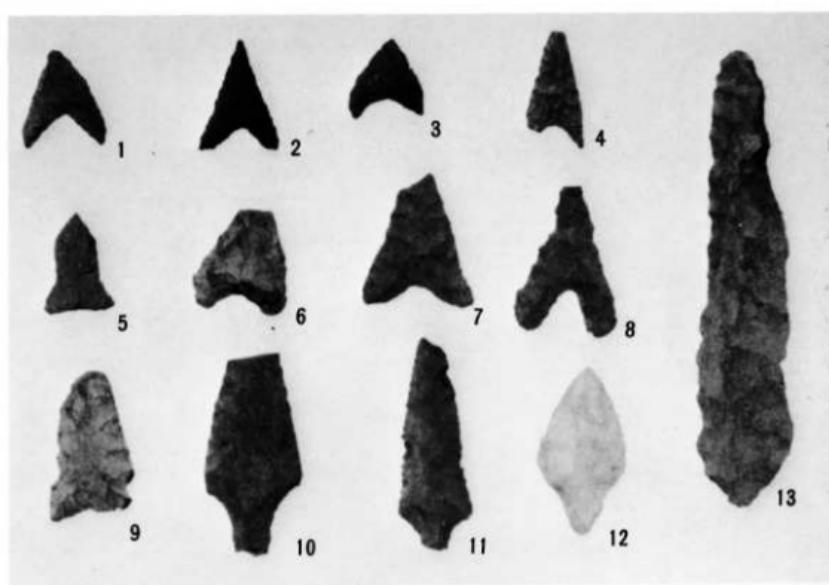
49



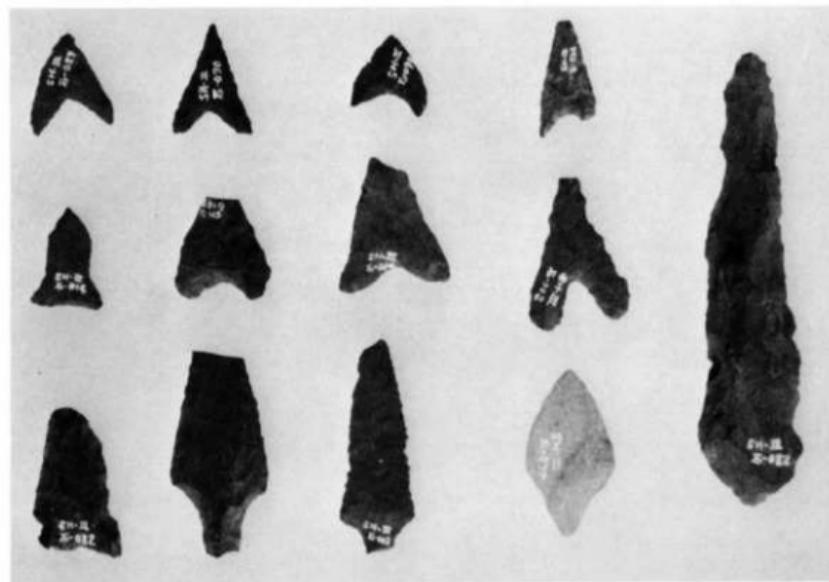
24



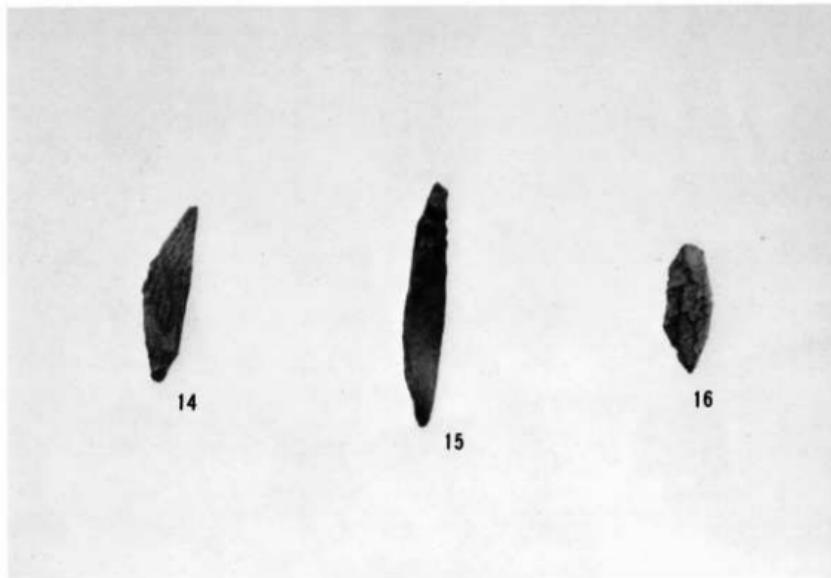
50



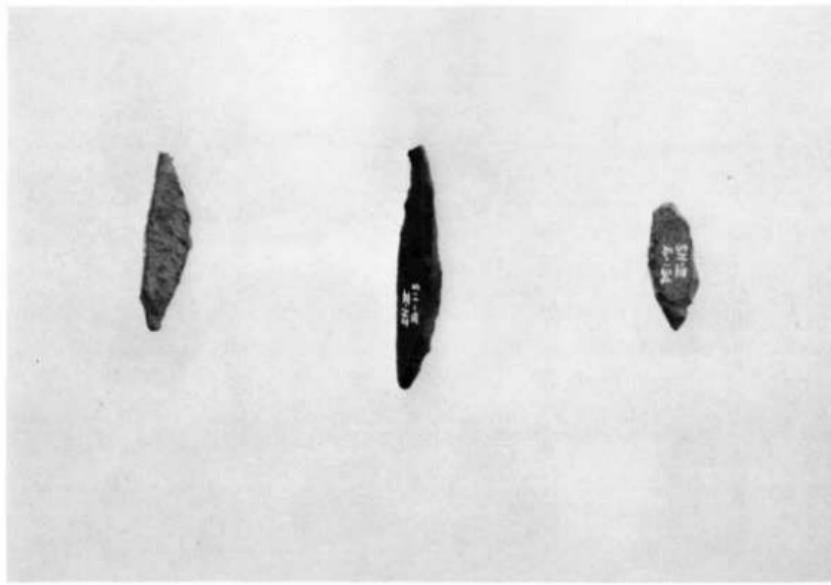
(A面)



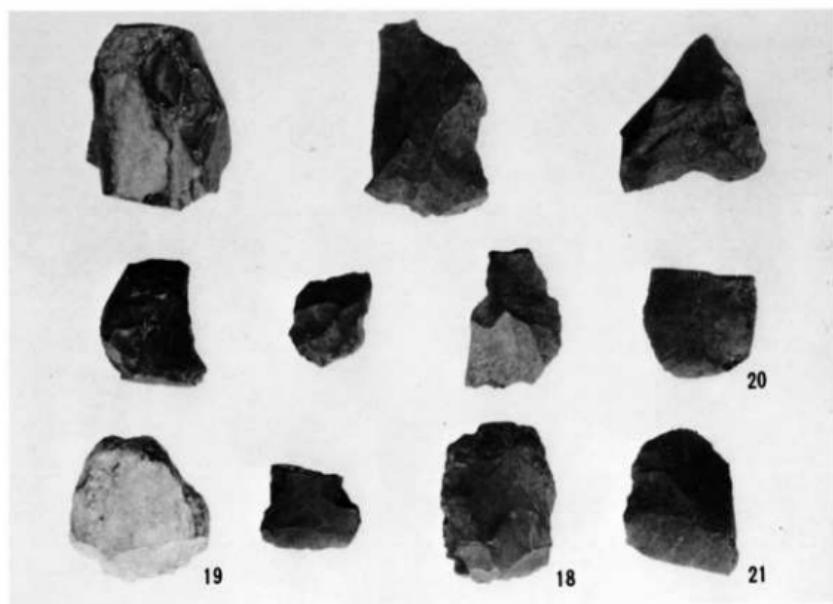
(B面)



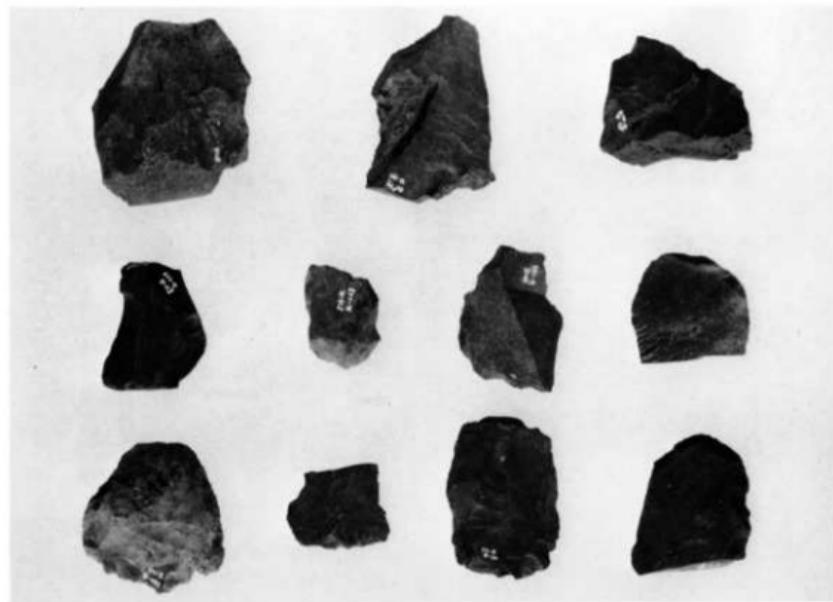
(A面)



(B面)

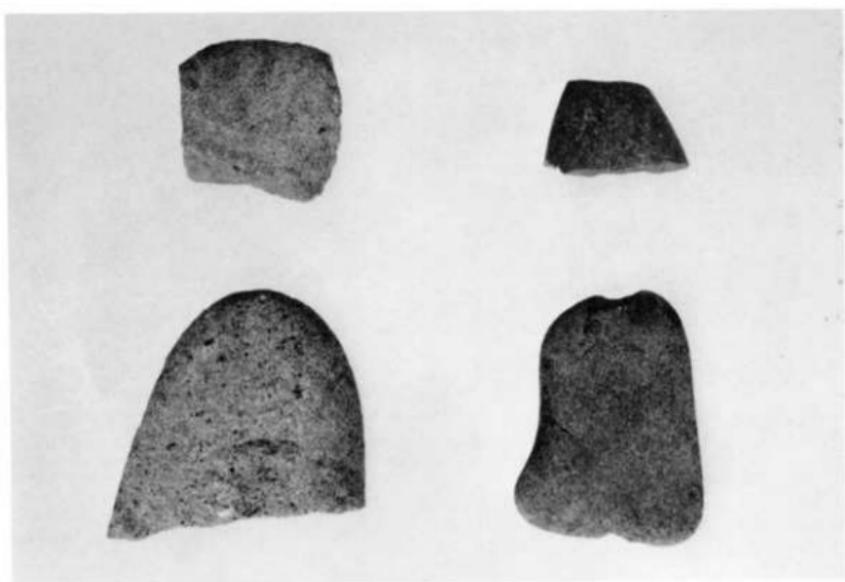


(A面)

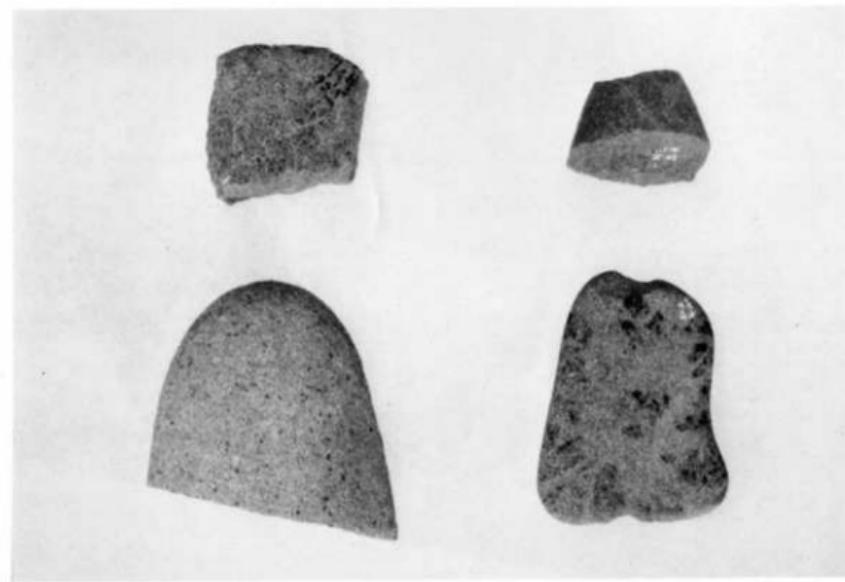


(B面)

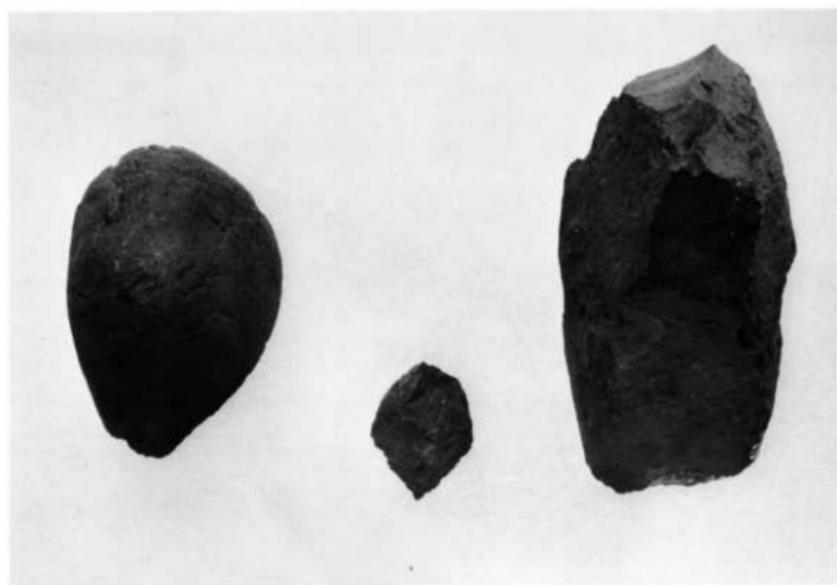




(A面)

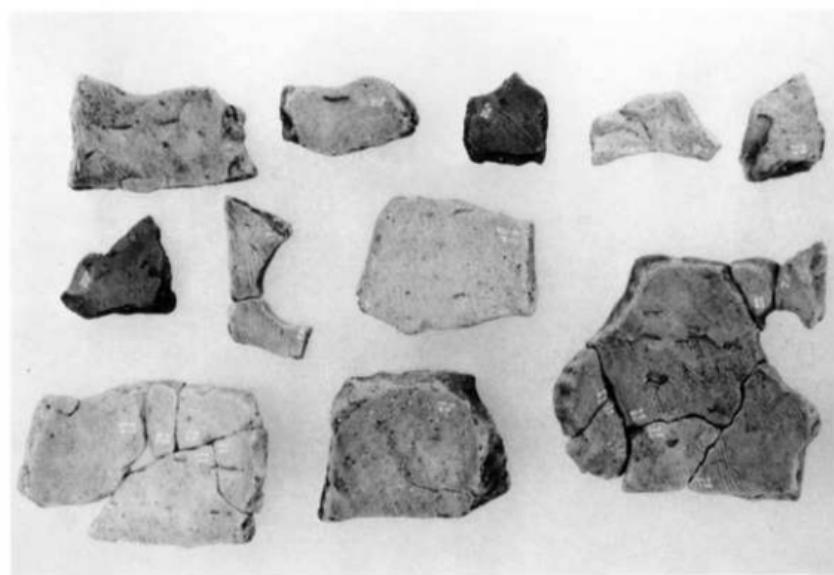


(B面)



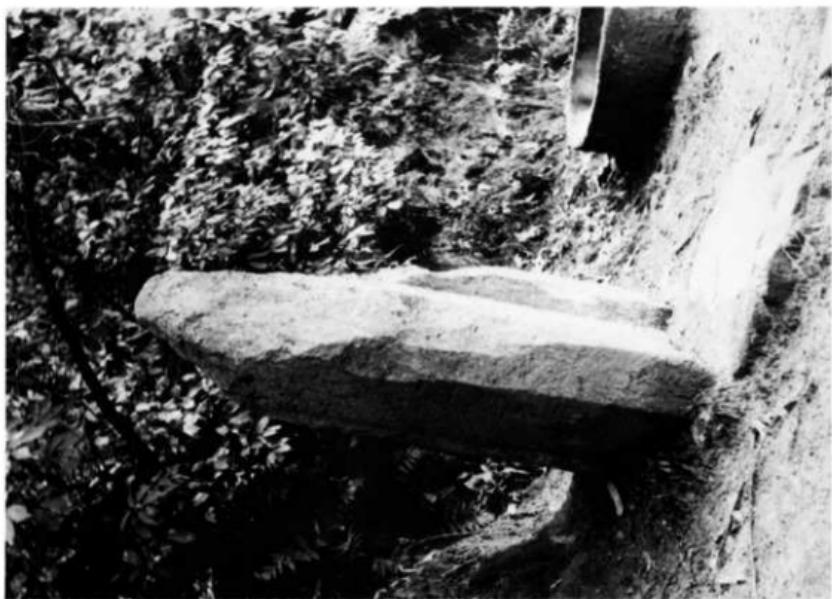


(A面)



(B面)





清滝古墳群発掘調査概要

昭和55年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会  
四條畷市中野本町1-1

印刷 田中耕株式会社